

70

第2部

新規・主要事業の動向



TQM・品質管理

1 品質管理検定

品質管理検定（QC検定）は、企業で働く方々に求められる品質管理の能力について、品質管理に関する知識を筆記試験で評価し、予め定めた基準によりその知識レベルを4段階に分けて認定している。第1回試験は2005年に実施した。級は1級～4級までであり、第16回から準1級を導入した。

本検定は、日本品質管理学会の認定を受け、日本科学技術連盟と日本規格協会が主催となり、全国規模で年2回（9月と3月）試験を実施している。

受検者は年々増加傾向にあり、第16回（2013年9月）の検定では、受検者数が4万5千人を超え、合格者は累計25万人を突破、第19回（2015年3月）の検定では、受検者数が初めて5万人の大会を突破し、受検申込者数は累計60万人を超え、合格者の累計は33万人を超えた。

近年では、利用企業の増加と業種の広がりが顕著で、特に高校を中心とした学校への普及には目を見張るものがあり、品質管理学習人口の裾野の拡大が確実に進んでいる。

▶ QC検定センター（日本規格協会）

一番ベースとなる4級のテキストが無料でダウンロードできる

<http://www.jsa.or.jp/kentei/index.html>

2 業務効率向上のための論理的伝達力 マスターセミナー

業務上の様々なトラブルや効率の悪さに対し、その原因がコミュニケーションの問題にあるケースが多く見られる。実は、そのコミュニケーションの阻害要因をさらに突き詰めていくと、思考の論理性的のなさにいきつく。元々、話すべき内容を論理的に整理しないまま言葉にしている人が多く、それがコミュニケーションの

阻害を引き起こしているのである。さらに「日本語の文脈依存性の高さ」に加え、近年では「誤った言葉や造語・新語の氾濫」「対面コミュニケーションの減少」など、問題は深刻化する状況にある。

しかしながら、一般的なコミュニケーション教育では話し方などの技術に終始しており、問題を解決しうる実務的な教育は存在していなかった。そこで、根本的な要素である「論理的な思考力」を養成するために2012年に開講したのが本セミナーである。

人は言葉を使って思考する。そのため、論理性を高めるには言葉の訓練が好適であるとの考えから、単語、文、文章、論旨といった言葉の要素を紐解き、言葉の訓練を通して論理性の養成をはかっている。

【内容】

目的と背景（社内のすべての文章には論理性が必要）、単語（少しの違いが概念まで壊してしまう）、文（単語と単語の関係を正しく築く）、文章（文を論理的に接続し、意味を正しく導く）、論旨（最初から最後まで素直に読めるようにする）、より伝わりやすい文章を書くために

【講師】

濱口哲也氏（東京大学大学院）

■ 活用シーン例：こんな経験はありませんか？

日常的な業務や報告書作成に始まり、営業活動、トラブルやクレーム対応、仕様書作成など、言葉・文章・文章の存在しない業務はありません。言葉に関して、以下のようなケースに遭遇したことはないでしょうか？

Case1:「部下から提出された報告書が、何を言いたいのかさっぱり分からない」

Before	After
■ Before 論旨がまとまっていないので文章にムダが多くなり、結果、内容が取り耽らかってしまう。報告書を何度も校正する上司も手間がかかるし、部下も何回も書き直すことになる。	□ After 報告すべき重要情報、確認したい点など、論旨を整理して「分かる」報告書を作成すれば、何度もやり取りせず一度の手間で済む。

活用シーン例

3 革新的課題解決法セミナー

ロシアの科学者アルトシュラーが提唱した問題解決手法TRIZをベースに、より実務での使用性を考慮したものが本セミナーで扱っている革新的課題解決法である。2010年に開講した。

製品の設計開発の際には、どうしてもトレードオフ（二律背反）が発生しがちである。たとえば「より薄く、しかし強度は高く」「出力を上げると騒音が出る」といった具合である。こういったトレードオフに対しては何かの革新的なブレークスルーが必要とされるが、正面突破で解決策を探っても常識的な発想が阻害要因となり、なかなかそこまでたどり着けない。TRIZではこの点を、過去の250万件もの発明特許で用いられたブレークスルーを、トレードオフを引き起こす条件を軸にしたマトリクスに整理することで解決をはかった。

しかし、それらの発明原理は40にもわたるため、実務で使用するには少しハードルが高い。その点を考慮し、本セミナーでは、より設計開発の実務で使いやすいようにリバイスしたマトリクスと発明原理を用いて講義・演習を行っている。

〔内容〕

革新的課題解決法のフレームワーク、革新的課題解決法の構成、矛盾解決法、革新的課題解決法の適用方法、グループ演習：身近な事例をもとに実践演習、総合質疑・まとめ

〔講師〕

長田 洋氏（東京工業大学）ほか

4 実践問題解決セミナーマネージャーコース

日科技連の中核的なセミナーである「品質管理セミナー部課長コース」を母体に、2009年に名称を改め大幅リニューアルを進めたのが本セミナーである。旧セミナーにおける、①品質の重要性と基礎知識の理解 ②マネジメント力の向上 ③課題形成力・課題達成力の向上を通じて“自律型マネージャー”を育成するという

コンセプトを守りつつ、5日間のカリキュラムを3日間に再編成した。

本セミナーでは、品質保証、方針管理、日常管理といったTQMにおけるマネージャーに必要な基礎知識を習得するとともに、問題解決・課題達成の実践的な取り組みにかなりの時間を割いている。自分の実際の問題・課題をテーマに改善活動を進めるが、受講後も約半年もの間、専任の講師による指導が続く。この独特のシステムが、実践的かつ深掘りした問題解決能力の習得につながっている。この実践能力の習得と、他社マネージャーとの「他流試合」を求め、同じ会社からのリピート参加が多いセミナーでもある。

〔内容〕

顧客満足向上への品質保証、経営目標を達成するための方針管理、業務目的を効率的に達成するための日常管理、グループワーク、参加者交流会、マネージャーとしての問題解決力、課題形成・達成力の向上、ケーススタディ、問題解決・課題達成のグループ研究

〔講師〕

永原賢造氏（元（株）リコー）ほか

5 品質管理セミナー部課長コース

品質管理の重要性と基礎知識、本質を理解し、自社や自部門の重要問題の解決・強化をはかる実践力を身につけることを目的に、2009年に「品質管理セミナー部課長コース」として大阪で再開した。2010年には、「組織活動の問題点」「経営に貢献する活動のあり方」「部課長の果たすべき役割とあるべき姿」などについて、今の企業や組織で「理解されていないこと」「できていないこと」などを重点的に指導し、問題解決をはかるために必要な能力を身につけることを目的とした内容に改訂し、2日間×3ヵ月（計6日間）で開催している。

〔内容〕

TQM活動の基本と関連する活動の位置づけ、組織管理と部課長の役割、人材育成の重要

性と進め方，方針管理の基本と進め方，日常管理の基本と進め方，品質保証活動の基本と進め方，経営に貢献するQCサークル活動，品質マネジメントシステムの有効活用，効果を高めるための改善活動のあり方，グループディスカッション

【講師】

岩崎日出男氏（近畿大学），西口幸雄氏（HBIコンサルタント事務所／元（株）西島製作所）ほか

6 失敗学と創造学セミナー

畑村洋太郎氏（東京大学名誉教授）の提唱された「失敗学」と，その応用編である「創造学」のセミナーで，2008年のセミナー創設時から，畑村氏の研究室にて共同研究をされていた濱口哲也氏（東京大学大学院）が指導している。

失敗学において重要なキーワードとなるのが「上位概念」である。失敗に対し，直接的に「なぜ」「誰が」という問いかけを行うと，ともすると近視眼的になり，失敗の本質を見落とす可能性がある。ここで上位概念という視点でものごとを俯瞰的に捉えることで，失敗で起きた個別事象を一般化・普遍化し，失敗の真の原因の把握，また，ほかの可能性の模索を通じた未然防止活動へとつなげていくことが可能になる。

創造学は，その上位概念を「要求機能」と置き換えることで，同じフレームワークを用いながらも，製品開発における独創的な発想や問題の解決法を導き出す考え方である。

年を重ねるごとに開催回数，参加者数ともに増えているのは，企業にとって有用な考え方として広く受け入れられている証左とも言える。

【内容】

失敗学：プロローグ，問題提起「今日日本で何が起きているか」，失敗学のすすめ，リスクマネジメントのための失敗学

創造学：思考展開図，要求機能を記述する，解決案を考える

【講師】

濱口哲也氏（東京大学大学院）

7 自動車部品メーカーの自律型品質保証・品質管理セミナー

日本の自動車メーカーによる生産拠点のグローバル展開に伴い，高品質を維持するために，現地部品メーカーから提供される部品の品質確保が必須となる背景を受け，2007年4月に「自動車部品メーカーの品質保証・品質管理研究委員会」を発足し，活動の基本構想となる「AMPQ（自動車部品メーカーの品質保証・品質管理）システム」の開発を行うことになった。

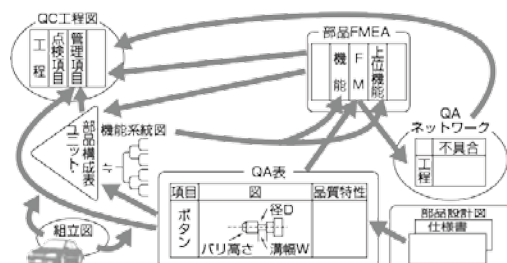
本委員会によって開発されたコンテンツにより，自動車部品メーカーによる品質保証のための各々の業務（機能系統図，部品FMEA，QA表，組立図，QC工程図，QAネットワークなどの作成）とそれらのつながり（関連）を理解し，それぞれを関連付けて実施することで，クレーム対応ではない自律的な品質保証活動を実現するためのセミナーとして，2008年2月に開講した。本委員会作成テキストを使用し，講義，演習，事例紹介を通じて学ぶ。2013年から「部品メーカーの自律型品質保証・品質管理セミナー」と改称した。

【内容】

QAとQCの関係，製品の設計から出荷までの各工程におけるQA活動の関連性，関連付けたQA活動を実際の業務にどのように落とし込むのか

【講師】

大藤 正氏（玉川大学），磯部孝征氏（市光工業（株）），田中孝司氏（（株）熊谷組），永井一志氏（玉川大学），原賀秀昭氏（コニカミノルタテクノロジーズセンター（株）），星野和夫氏（（有）ライアブルテック）



部品メーカーの自律型品質保証・品質管理システム

8 技術力で差をつけるための 実験計画法実践セミナー

実験計画法セミナー（東京クラス）は、従来、「入門コース」「実践コース」の2コースを開催してきたが、2015年に全面リニューアルし、「技術力で差をつけるための実験計画法実践セミナー」と名称を変え、「エントリーコース」「スタンダードコース」「エキスパートコース」の3つのコースに生まれ変わった。

カリキュラムの改訂にあたり、実験計画法の習得だけを目指すのではなく、技術的問題、課題に対する手法の応用方法や、難解な問題、課題へどのように攻めるのかに主眼を置き、実験計画法はそのための手段として位置付けた。

3つのコースを順番に受講することで、ステップアップをしながら、より難解で複雑な問題への対応知識が習得できるようにした。

【講師】

山田 秀氏（筑波大学）、奥原正夫氏（諏訪東京理科大学）ほか、実験計画法運営委員

【カリキュラム】

エントリーコース

第1日	技術力獲得のための実験計画法とは 統計的方法の基礎 一元配置実験の計画と解析（質的因子）
第2日	一元配置実験の計画と解析（量的因子） 二元配置実験（質×質、量×量） 繰り返しのない二元配置実験 直交表の紹介

スタンダードコース

前期	第1日	技術開発における統計的手法の役割、多元配置実験復習、直交表による一部実施実験（1）(2)、事例紹介
	第2日	直交表による一部実施実験・事例紹介、乱塊法・分割法
後期	第3日	乱塊法・分割法についての演習、測定の繰り返し・反復、複雑な問題への対応：欠測値、計数値の扱い、DEゲーム(1)逐次探索ゲーム
	第4日	DEゲーム(2)(3)前日の続きと、結果発表表とまとめ、エキスパートコースへ続く道

エキスパートコース

第1月	第1日	技術開発における統計的手法の役割、分散分析による効果の把握、直交表などの復習、頑健性向上：パラメータ設計（手法）
	第2日	頑健性向上：パラメータ設計（事例）、頑健性向上：パラメータ設計（演習）、鳥コンシミュレータ：ダビンチを超える
第2月	第3日	連続変数の最適化：最小二乗法、応答曲面法、最適計画、応答曲面など適用事例の紹介
	第4日	連続変数の最適化：ダイナミック特性の要因解析、サルベージ実験、ピッチングマシン・シミュレータ：魔球を再現しよう
第3月	第5日	もろもろの話題（現DEとその周辺）、多目的設計探索、シミュレーション実験
	第6日	ロバスト最適化、ロバスト最適化演習：RCカー、総合質疑

9 実験計画法セミナー（大阪クラス）

実験計画法セミナー入門コースは、2003年からオリジナルテキストに改変し、8日間から6日間の開催とした。2012年には企画委員会により、セミナー用テキストとして『実務に使える実験計画法』（日科技連出版社、2012）を執筆し、出版した。その後、受講者からの要望もあり、2014年からは実践コースから乱塊法と分割法を入門コースに移し、また、パソコンも常時使える環境にして、8日間の開催とした。

大阪で開催する本セミナー入門コースの特長は、前期は、実験計画法の考え方や手法の解説と手計算による時間内演習を主とすること、後期は、手法の解説に加え、実務での活用の仕方を効率よく習得できるよう、Excelマクロを活用したソフトによる演習やシミュレーション実験を実施することにある。

一方、入門コース修了者のステップアップ



コースである実験計画法セミナー実践コースは、2014年から6日間を4日間の開催に変更し、発展的手法の解説と実データを用いた実践的トレーニングを中心としている。

[内容]

入門コース

実験計画法の活用場面、統計の基礎、検定・推定、一元配置、二元配置、多元配置、直交表、乱塊法、単回帰、線形推定論・線形検定論、タグチメソッド、実験のデザイン、Super DOE分析、シミュレーション実験

実践コース

線形推定論・線形検定論、Excel専用ソフトの活用、直交表（擬因子法、アソビ列法、補遺）、重回帰（演習含む）、Excel専用ソフトを用いた解析と総合演習、計数値を応答とする実験、検出力と実験の大きさ

[講師]

松本哲夫氏（ユニチカ㈱）ほか

10 モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース

近年、ビッグデータに対する期待がビジネス界で高まるとともに、ビジネスとビッグデータ解析をつなげられる人材、いわゆる「データサイエンティスト」の育成が急務であると言われるようになった。この状況を受けて、2013年からSQC実践研究会では、製造業におけるビッグデータの活用について議論を展開してきた。

その成果物として、2015年に「モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース」（5日間：予備コース、基礎編2日間、活用編2日間）を開設した。第1回コースは満席で成功裏に終了した。

本コースでは、製造業に携わる技術者向けに、ビッグデータの解析を平易に解説している。

[内容]

今、なぜモノづくり企業でデータサイエンスが必要なのか、ビッグデータ解析前の処理、ビッグデータを用いた異常の検知、ビッグデータを用いた要因解析、演習

[講師]

吉野 陸氏（㈱デンソー）

11 マハラノビス・タグチ（MT）システム入門コース

マハラノビス・タグチ（MT）システムは、タグチメソッド（品質工学）の中でも比較的新しい手法であり、今後ものづくりの現場で一層の活用が期待されている。しかし、MTシステムが急速に発展したため、有力メーカーが主力製品の出荷検査をすべてMTシステムで行っていると報告される一方、品質管理や技術開発などものづくりに携わる多くの人がその名を聞いたことがない、という状況にあった。

このような状況を受けて、MTシステムを実践的かつ体系的に、ものづくりに携わる方々への普及・教育を目的として、2010年に「マハラノビス・タグチ（MT）システム入門コース」（2日間）を開設した。

[内容]

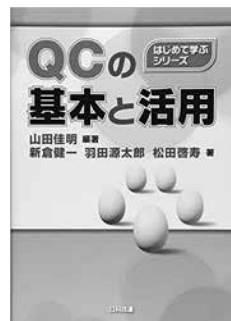
パターン認識とMTシステム、MT法、T法(1)、T法(3)=RT法、事例紹介、演習

[講師]

手島昌一氏（アングルトライ㈱）、長谷川良子氏（長谷川技術士事務所）、立林和夫氏（元富士ゼロックス㈱）

12 eラーニング QC（品質管理）の基本と活用

パソコンやインターネットの普及により、いつでも、どこでも手軽に品質管理の基本を学べる環境を提供することを目的として、2010年8月にeラーニング「QC（品質管理）の基本と活用」を開講した。このeラーニング教材は、『はじめて学ぶシリーズ QCの基本と活用』（日科技連出版社、2009）をベース



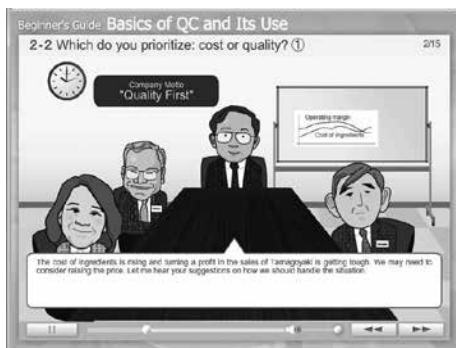
にしている。

内容は、品質管理検定（QC検定）4級～3級のチャレンジにも活用でき、品質管理を初めて学ぶ企業・組織の新入社員や内定者、さらには大学や専門学校・工業高校の学生にも活用できる内容である。

2014年4月には、英語版を開講した。国内外で働く外国人社員の方に利用いただき、好評である。



日本語版の目次



英語版

13 次世代TQMの構築研究委員会

■準備委員会（2007年3月～12月）

日本科学技術連盟と日本品質管理学会の共同プロジェクトとして、下記を目的に「次世代TQMの構築」準備委員会の第1回会合が、2007年3月27日に開催された。

- ・TQMをコアとした、次世代の品質管理技術・経営支援技術の新しい体系（科学的質経営の指導原理）を構築する。
- ・この次世代TQMを広く普及させることで、

イノベーションの促進と日本企業の産業競争力向上に貢献する。

以降、準備委員会は6回開催され、次の4つのWGが組織された。

WG・M：経営質革新WG

WG・I：イノベーション・価値創造

WG・V：バリューチェーン質革新

WG・E：次世代TQM普及プログラム・教育プログラムWG

また、この間、「TQM・デミング賞」に関する意見交換会（品質懇話会）を開催し、TQMに造詣の深い産業界のトップに現状と今後について意見を徴収した。

並行して、「IT産業界についてのご意見を伺う会」「エレクトロニクス業界および総合電機業界についてのご意見を伺う会」などを開催し、次世代TQMの構築にあたり、各業界の状況を調査した。

■研究委員会（2008年2月～2009年6月）

全6回の会合が開催され、4つのWGの中から、下記のテーマ・プロジェクトが発足し、検討が重ねられた。

[WG・I：イノベーション・価値創造]

SG1：価値創造・表現

SG2：創造的商品設計・開発

[WG・V：バリューチェーン質革新]

①一貫通貫自工程完結、②超短納期開発、③多目的最適設計、④製品寿命設計思想・商用車、⑤製品寿命設計思想・家電、⑥プロセスの弱点顕在化と事故撲滅、⑦組み込みソフトの品質確保

■研究会終了後

[WG・M：経営質革新WG]

『クオリティマネジメント』誌に連載「品質魂」第1回～第9回（2009年4月号～12月号）に記事掲載を行った。

[WG・I：イノベーション・価値創造]

“SG2：創造的商品設計・開発”については、後に「革新的課題解決法セミナー」として日科技連において事業化した。

[WG・V：バリューチェーン質革新]

①一貫通貫自工程完結については、後に『開

発・設計における“Qの確保”』（日本規格協会，2010）として出版した（2010年度日経品質管理文献賞受賞）。

その他のWGについても日本品質管理学会での発表や説明を実施している。

＊

次世代TQMの構築プロジェクトは，すべてを普及・教育のプログラムまで発展させるには至らなかったが，一部については事業化を実現した。研究の過程において，時代の変遷に伴うTQMとその周辺の新たな課題を浮き彫りにし，その対応を検討することによって課題に対する方向性を示した。

14 品質コストマネジメント研究部会

企業経営においてコスト管理は切実な課題であり，特に品質管理活動の中で，「品質コストマネジメント」の考え方やその応用は，企業経営にとって，大変有益かつ効果的と考え，わが国の産業界の競争力向上をはかるために，「品質コストマネジメント」の企業へのさらなる普及と展開を目的として，2009年9月に「品質コストマネジメント研究部会」を設立した。

その成果物として，『品質コストマネジメント・ハンドブック』を冊子にまとめ，2015年7月に発行した。また，2016年度に品質コストマネジメントセミナーを開催予定である。



【目的】

- ・品質コストマネジメントに関する共通理解を得て，品質コストに関する誤解を払拭し，その導入・普及を促進させる方向性を示す。
- ・わが国の品質コストマネジメントの現状を把握し，品質管理および品質コストマネジメントの課題を明確化するとともに，その是正策を検討する。

【研究部会委員】 ◎委員長，○副委員長，順不同

- ◎伊藤嘉博氏（早稲田大学）
- 藤井暢純氏（サンデン(株)）
- 伊東玄二氏（日本水産(株)）
- 梶原武久氏（神戸大学大学院）
- 長沢伸也氏（早稲田大学）
- 白石 崇氏（清水建設(株)）
- 新木 純氏（積水化学工業(株)）
- 黒沼陽一郎氏（(株)東芝）
- 黒木優一郎氏（富士通(株)）
- 杉本弘実氏（富士ゼロックス(株)）
- 日時壮浩氏（早稲田大学）

15 SQC実践研究会

実験計画法をはじめとするSQC手法の普及と発展，新たな手法の開発，人材育成を目的として，2007年にSQC実践研究会（SQCPRG）を設立した。企業の実務者や大学講師など，実験計画法事業の運営委員を中心として，産学が協同で問題解決や相互研鑽に取り組み，その活動の成果は，毎年11月に開催するクオリティフォーラムにて紹介している。現在，品質管理セミナーベシックコースの講師陣をメンバーに加え，継続して開催している。

また，2013年からは，製造業におけるビッグデータの活用について議論を展開し，その成果物として，2015年に「モノづくりにおける問題解決のためのデータサイエンス入門コース」が開設されるなど，多くの成果をあげている。

16 知識構造化シンポジウム

田村泰彦氏（(株)構造化知識研究所）の提唱する，SSM（Stress-Strength Model）の事例紹介と最新情報の提供を中心に開催しているシンポジウム。2009年に第1回を開催し，2015年で第7回を数える。

SSMとは，とすると個別的でローカルになりがちな過去のトラブル事例などの失敗情報・知識を一般化することで，構造的に再構成

し、製品の設計開発において効果的・効率的に再利用することを目指したモデルである。

仮に、どれだけ有効な知識があったとしても、たとえば、それが製品特有の用語で記述されていたり、検索キーワードが適切でなかったり、あるいは因果関係が明確にされていなかったり、という状況では、その情報・知識を探すのに手間がかかり過ぎたり、あるいはそもそも存在が知られなかったりなど、再利用に至らないケースが多い。そこで、それらの情報を再利用しやすい形にルール付けし、蓄積することを可能にしたのがSSMである。

SSM実践企業も増え、シンポジウムにもかなり広範な企業からの参加が得られるようになり、毎回200名近く参加をいただいている。



第7回知識構造化シンポジウム

17 クオリティフォーラム

2000年に、時代の要請から「サービス産業における品質管理大会」「部課長スタッフ品質管理大会」「職組長品質管理大会」を統合し、「クオリティフォーラム」という名称のもと、全国の企業・病院・行政・組織による“クオリティ”に関する事例発表を行っている。企業で重要な役割を担っている部課長を主な対象とし、総勢約300～400名の参加者のもと、品質月間の11月に2日間で開催している。

2010年から、企画Session（依頼講演）、一般事例発表でプログラムを構成しており、あわせて日本品質奨励賞の受賞報告講演会も組み込まれている。企画Sessionは、多方面の業界から

時宜に合った話題性のあるテーマでの講演を選定している。一般事例発表は、公募により厳選された改善活動を中心とした発表で構成している。



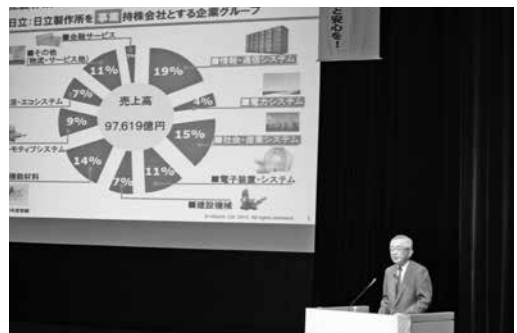
クオリティフォーラム 2015

18 品質経営トップマネジメント大会

品質月間である11月に開催する行事の一つで、1963年から、その年の重要課題、ならびに品質月間テーマをもとに、学識経験者や企業経営者に講演いただいている。これからの日本企業の考え方や取り組み方などを見つめ直していただく機会となっており、学識経験者、企業経営者層が相互に知識と経験の交流をはかることを目的として開催している。半日の講演会形式で、参加しやすいスケジュールとなっている。

企業の品質経営度調査の実施年は、「優秀企業賞」の授賞式をプログラム内で行っている。

2005年から、日科技連賛助会員の特典の一つとして、会員会社は無料招待している（1口3名）。



2015 品質経営トップマネジメント大会

品質経営トップマネジメント大会講演一覧

年	講演者、講演テーマ
2006年	三澤一文氏（アクセンチュア㈱）「企業競争力と品質管理の新たな展開－製品開発の現場の視点から－」、 有馬利男氏（富士ゼロックス㈱）「21世紀に求められる企業経営」
2007年	三村明夫氏（新日本製鐵㈱）「新日本製鐵㈱におけるグローバル経営」 野口悠紀雄氏（早稲田大学大学院）「日本経済と企業経営」
2008年	富山和彦氏（㈱経営共創基盤）「日本企業の再活性化－事業再生の取り組みを踏まえて」 西田厚聰氏（㈱東芝）「東芝イノベーションによる経営戦略」
2009年	新宅純二郎氏（東京大学大学院）「持続可能な品質とは－高品質が顧客に伝わるシステムづくり－」 財部誠一氏（経済ジャーナリスト）「生き残る企業の条件」
2010年	酒巻 久氏（キャノン電子㈱）「品質経営の原点にかえり先駆者の知恵に学ぶ」 向殿政男氏（明治大学）「安全と安心が品質経営の中心になる時代」 似鳥昭雄氏（㈱ニトリホールディングス）「ニトリ経営の強さの秘密～真の製造・物流・小売業とは～」
2011年	遠藤 功氏（早稲田大学ビジネススクール、㈱ローランドベルガー） 「『日本品質』で攻める！～グローバル競争を勝ち抜くためには～」 川田達男氏（セーレン㈱）「21世紀を生き残るための企業革新」
2012年	中尾政之氏（東京大学）「“まさか”の発想の失敗学～違和感を起点に守りから攻めの失敗学へ～」 斎藤 保氏（㈱IHI）「IHIグループのものづくり戦略～やっぱり日本品質～」
2013年	圓川隆夫氏（東京工業大学大学院）「価値ある品質で新たな成長を！～ものコトづくり時代の品質経営～」 宇佐美 徹氏（アルパイン㈱）「アルパインにおけるグローバルなものづくりと顧客価値の創造」
2014年	藤沼彰久氏（㈱野村総合研究所）「野村総研におけるシステム運用の品質改善－見える化でトラブル8割減－」 楠木 建氏（一橋大学大学院）「クオリティ企業の条件」
2015年	川村 隆氏（㈱日立製作所）「日立製作所のV字回復経営」 鈴木和幸氏（電気通信大学大学院）「品質保証と信頼性～あなたが主役 みんなでつくる 感動と安心を！～」 西岡靖之氏（法政大学）「IoTによる製造現場発『つながる工場』のためのグランドデザイン ～『日本版Industrie4.0（インダストリー4.0）』の取り組み～」

信頼性・製品安全

1 設計・開発における未然防止手法セミナー

新製品の新規性に応じて2種類のデザインレビュー（FMEAを軸としたFull Process DRとDRBFM（Design Review based on Failure Mode）を使い分け、未然防止の視点から2つのデザインレビューの目的を理解し、事例紹介、演習を通じて実践力を養成することをねらいとし、2012年6月に2日間のセミナーとして開設した。

【内容】

モノ造り品質フレームワーク、デザインレビューによる有効な未然防止、Full Process DRのプロセスとツール、Full Process DRのグループ演習、レビューアに必要なスキル、有効なデザインレビューの進め方、Quick DRのプロセスとツール、Quick DRのグループ演習

【講師】

大島 恵氏、奈良敢也氏（日産自動車㈱）

2 設計・開発における未然防止手法 デザインレビューレビューア育成セミナー

有効なデザインレビュー（以下、DR）を実践するにはレビューアの育成が不可欠である。そこで、DRのプロセスやツールの教育に加え、DRを受けるエンジニアの考えを引き出し、育成し、DRを活性化するためのコーチングスキルを養成することをねらいとし、2013年2月に1日のセミナーとして開設した。

【内容】

未然防止のための有効なDR、なぜレビューア教育が必要か、DRのプロセスとツール、DRに必要なコーチングスキル、コーチングスキルを活用したDR、レビューア十カ条とべからず集、グループ・ディスカッションと発表

【講師】

大島 恵氏（日産自動車㈱）

3 設計・開発における品質ばらつき抑制 手法セミナー

ばらつきを抑制し、品質目標を達成するために、日産自動車において開発現場でグローバルに実践している品質工学の戦略的な活用方法であるQVC（Quality Variation Control）プロセスや標準ツールを、事例や演習を通じて実践的に学び、身につけることをねらいとして、2013年10月に1日のセミナーとして開設した。

【内容】

モノ造り品質フレームワークと品質ばらつき抑制、QVCプロセスの概要と適用事例、QVCの標準ツール：機能展開、品質工学の基礎知識、QVCプロセスの標準ツール：設計感度解析、QVCプロセスの標準ツール：ばらつき影響度解析、QVCプロセスの適用事例

【講師】

大島 恵氏、奈良敢也氏（日産自動車㈱）

4 設計・開発ヒューマンエラー防止セミナー

人はどのようにして間違えるものなのかを知り、ミスを防ぐにはどのような手法があるのかを、講義と演習を通じて身につけることをねらいとして、2010年11月に2日間セミナーとして開設した。

【内容】

ヒューマンエラー防止の理論、設計・開発部門のヒューマンエラー、ヒューマンエラー後の問題解決の考え方、設計・開発部門のためのエラー防止のケーススタディ演習、エラーに備えるための業務手順の合理化、仕事をわりやすくする代表的手法、現場改善のアプローチ方法、

設計・開発部門のための業務改善演習（手順の合理化、書式やマニュアルの改良）

【講師】

中田 亨氏（産業技術総合研究所）

5 信頼性管理・信頼性設計入門コース

大阪で開催していた、「信頼性セミナー入門コース」を2011年に「信頼性管理・信頼性設計入門コース」と「信頼性試験・故障物理入門コース」（2012年に「入門」を「実践」と改称）に分割し、リニューアルした。

上述のうち、信頼性設計入門コースは、製品の信頼性と保全性を確保するための最低限必要な基礎知識を身につけることを目的とした2日間コースとしてリニューアルした。

【内容】

信頼性管理、故障の確率モデル、システムの信頼性と保全性、信頼性設計

【講師】

貝瀬 徹氏（兵庫県立大学）、高木 仁氏（三菱電機株）、熊谷利枝氏（三菱電機株）、岡本朗氏（株村田製作所）

6 信頼性試験・故障物理実践コース

市場ストレスと故障メカニズムの関係をよく知って、加速試験や市場故障の再現など規格がない試験の組み立て方や実践の仕方を身につけることを目的とし、2日間コースとしてリニューアルした。

【内容】

信頼性データ解析法、信頼性試験、故障物理

【講師】

松岡敏成氏（三菱電機株）、本山 晃氏（パナソニック株）

7 実践！信頼性・品質技術研究会

前身の「信頼性開発技術研究会」（活動期間15期）を2011年5月にリニューアルし、改称

した。「メカ」「エレキ」といった従来の技術領域のボーダーレス化に対応し、「材料」や「マネジメント」など信頼性技術の原理・原則に即した分科会テーマを設置した。産業界における各分野の信頼性に関し、現在抱えている諸問題とその解決法の事例研究や討論を通じ、より役立つ信頼性の展開をはかれるよう、また実務面での継続研究を兼ねた「信頼性技術者の話し合いの場」となることをねらいとしている。

毎年5月～翌年3月の1年間を会期とし、年7回の例会を実施している。2015年で第5年度を数える。

8 「R-Map」を商標登録

R-Mapを広く産業界で活用してもらうため、ならびに個人が商業目的で使用することを制限するために、2014年7月11日付けで商標登録を行った。

出願番号：商願2014-018355

指定区分：第9類（電子出版物）、第16類（印刷物）、第41類（知識の教授、セミナーの企画・運営又は開催）

9 特別セミナー「迫りくる法改正、変わる安全設計メーカー責任を果たすリスクアセスメントとは」

事業者が自主的に行うリスクアセスメントをはじめとして、製品安全に求められる考え方や取り組みについて最新情報を提供することをねらいとして、日経BP社と共催で、2011年7月25日に大阪、7月27日に東京にて開催した。

【講演内容】

「日本における製品安全の規制と今後」「製品安全における世界の動向と日本メーカーが取り組むべき姿」「『リスクアセスメント・ハンドブック〈実務編〉』の発行目的と使い方」「企業におけるリスクアセスメントの実践事例～R-Map手法によるリスク分析と対策の評価～」

パネル討論：「日本のリスクアセスメントの現状と課題～誤使用、不注意事故は防げるか？～」

[講師]

経済産業省商務グループ、向殿政男氏（明治大学）、松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）、伊藤 淳氏（日立アプライアンス(株)）、長田敏氏（製品評価技術基盤機構）、高杉和徳氏（製品安全コンサルタント）、佐野真理子氏（主婦連合会）*、河村真紀子氏（主婦連合会）**

*大阪のみ、**東京のみ



10 消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース

企業の関心も高くなっているリスクマネジメントを定量的に判定し、数値的にとらえるR-Map手法の考え方・使い方を入門レベルで広く提供することをねらいとして、2008年10月に1日セミナーとして開設した。2010年に後述の2コース11、12にリニューアルした。

[内容]

R-Map概論、発生した事故のR-Map分析、対策案のR-Map評価、開発段階からの安全設計、社内リスクマネジメントシステムの構築

[講師]

松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）

11 はじめてのR-Map半日コース

「消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース」をリニューアルし、販売後のリスク評価に限定し、2010年5月に半日セミナーとして開設した。2012年に後述のコース13にリニューアルした。

[内容]

R-Map概論、重大事故のR-Map分析、ヒヤリ・ハット事故の分析、是正処置・予防措置

[講師]

松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）、横井靖氏（日新火災海上保険(株)）、井上 泰氏（(株)インターリスク総研）

12 R-Mapを活用したリスクアセスメント1日コース

「消費生活用品生活用製品メーカーのためのリスクアセスメント1日コース」をリニューアルし、開発段階からのリスクアセスメントに限定し、2010年5月に1日セミナーとして開設した。2012年に後述のコース14にリニューアルした。

[内容]

R-Map概論、リスクファインディング技法、PSPTA法、セーフティモジュール法、演習

[講師]

松本浩二氏（製品評価技術基盤機構）、伊藤淳氏（日立アプライアンス(株)）、小里幸徳氏（住友化学(株)）

13 流通段階・販売後のR-Map活用コース

「はじめてのR-Map半日コース」をリニューアルし、2012年5月に開設した。

[内容]

安全な製品の流通、市場情報のR-Map分析、リコールマネジメント

[講師]

高杉和徳氏（製品評価技術基盤機構）、井上泰氏（(株)インターリスク総研）

14 開発段階のR-Map活用コース

「R-Mapを活用したリスクアセスメント1日コース」をリニューアルし、2012年5月に1日セミナーとして開設した。

【内容】

リスクアセスメントの実践方法と危害シナリオ, PSPTA法, セーフティモジュール法, 演習

【講師】

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 伊藤 淳氏 (日立アプライアンス(株)), 小里幸徳氏 (住友化学(株))

15 R-Map入門コース

R-Map手法に興味のある方, これから学びたいと考えている方, ならびにR-Map関連セミナーに参加を検討している方を対象に, R-Map手法の考え方・使い方を入門レベルで広く提供することをねらいに, 2012年4月に半日の無料セミナーとして開設した. 2015年度から内容を拡充し有料で開催している.

【内容】

リスクアセスメントの基本, R-Map手法の特徴, R-Mapを使ったリスクの評価方法

【講師】

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 杉山 明久氏 (元 ヤマハ発動機(株))

16 R-Map活用コース：市場措置判断

製品事故が発生した場合の迅速かつ適切な判断とサービスについて学ぶことをねらいとして, 2015年9月に1日セミナーとして開設した.

【内容】

法規制 (日本と欧米), 判定フローと措置の選択, 消費生活用製品の判断事例, 医療機器の判断事例, リコール判断のケーススタディ

【講師】

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 井上 泰氏 (株)インターリスク総研), 大田利幸氏 (元 パナソニック(株)), 三本利幸氏 (株)日立メディコ)

17 R-Map活用コース：リスクアセスメント

危害シナリオの作成とそのシナリオに基づく評価方法, どこまでリスク低減をしなければならないか, 各保護方策のリスク低減効果の考え方について学ぶことをねらいに, 2015年9月に2日間セミナーとして開設した.

【内容】

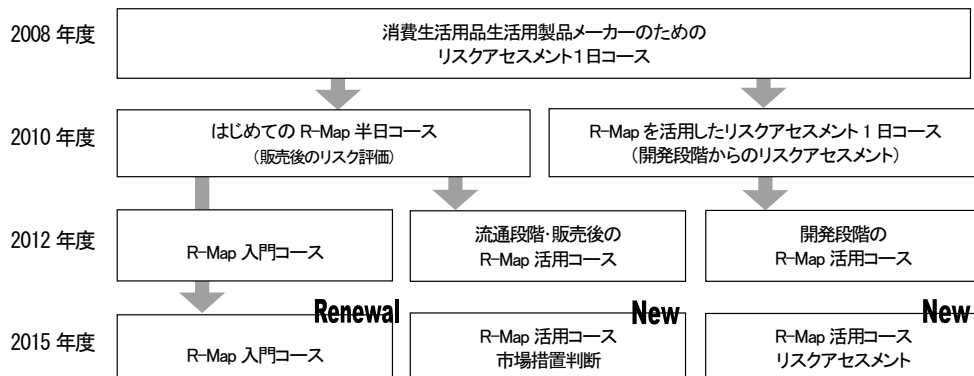
リスクアセスメントプロセスと記録の保存, リスクファインディングと危害シナリオ, PSPTA法によるリスク分析と低減, セーフティモジュール法によるリスク分析と低減, 実機によるリスクアセスメントケーススタディ

【講師】

松本浩二氏 (製品評価技術基盤機構), 井上 泰氏 (株)インターリスク総研), 伊藤 淳氏 (日立アプライアンス(株)), 池沢 学氏 (株)日立メディコ)

▶ R-Map手法について

<http://www.juse.or.jp/reliability/introduction/>

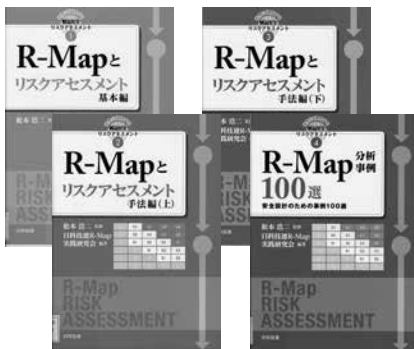


R-Map 関連セミナー変遷

18 R-Map実践研究会

2005年に発足した本研究会は、リスクアセスメントに特化し、リスクを「見える化」するための異業種メンバーで構成された研究会である。2015年で第11年度を数える。

2014年に創設10周年を記念し、また10年間の研究会の成果物として、世界に通用する製品安全リスクアセスメントシリーズ（全4巻）を日科技連出版社から発行した。この出版記念講演会を2014年10月16日に日科技連・東高円寺ビルにおいて開催した。



- 第1巻『R-Mapとリスクアセスメント基本編』
- 第2巻『R-Mapとリスクアセスメント手法編・上』
- 第3巻『R-Mapとリスクアセスメント手法編・下』
- 第4巻『R-Map分析事例100選
-安全設計のための事例100選-』

19 信頼性通信教育講座

受講者自身の都合により、いつでも空いている時間・好きな場所で効率的に学習してもらうことをねらいとして、2008年4月に6ヵ月間の通信講座を開設した。2012年2月で休止となった。

【内容】

信頼性の基礎、信頼性データ解析、信頼性設計(1)、信頼性設計(2)、信頼性試験と故障物理、信頼性マネジメント

【講師】

益田昭彦氏（帝京科学大学）、青木茂弘氏（日本鉄道電気設計㈱）、石田 勉氏（元 日本アイ・

ビー・エム㈱）、西 干機氏（元 宇宙航空開発研究機構）、山崎謙介氏（元 ㈱日立製作所）

20 信頼性・保全性シンポジウム

1971年に第1回を開催し、その後、年1回継続開催し、2015年で第45回を数える。本シンポジウムでは、時流にあった講演をはじめ、一般の研究発表、企画セッションのプログラムで開催している。

展示コーナーの企画として、昼休憩を利用した「展示ブースツアー」（第43回から）と「ランチセッション」（第45回から）を実施している。

第10回から、推奨報文制度を設け、参加者の推薦のもとに本シンポジウム組織委員会にて、推奨報文賞、奨励報文賞を決定している。第45回までの受賞件数は、推奨報文賞94件、奨励報文賞23件である。

【信頼性・保全性シンポジウムメインテーマ】

回数	年	メインテーマ
36	2006	信頼性のフロンティア
37	2007	安全と安心を守る「使用の信頼性」
38	2008	グローバルビジネスにおける『品質と信頼性』-ブランド戦略のコア・コンピタンス-
39	2009	信頼性と安全性の接点
40	2010	環境と信頼性・安全性の両立に向けて
41	2011	イノベーションと信頼性 -国際的協調と分業-
42	2012	イノベーションと信頼性
43	2013	信頼性、保全性 -材料、デバイスからシステムまで

*第44回（2014年）以降はテーマを設定せず。



第45回信頼性・保全性シンポジウム

ソフトウェア品質

1 SPCからSQiPへの呼称変更

1980年に日本におけるソフトウェア製品の品質向上と効果の開発の方法論の確立を目指して設置された「ソフトウェア生産管理研究委員会」(Software Production Control), 呼称SPCは、本活動が「ソフトウェア品質に関する活動」とであるとわかりやすくすることと、ソフトウェア技術職という専門的矜持を大事にしたいという思いから“Profession”を加えて、2007年にSQiP (Software Quality Profession) に改称した。また、正式名称も「ソフトウェア品質委員会」に改称した。

2010年8月には、活動30周年を記念して『SQiP 30周年記念誌』を発行するとともに、ソフトウェア品質シンポジウムの懇親会とあわせて30周年記念パーティーを開催した。

委員長は、初代菅野文友氏(岩手大学)から飯塚悦功氏(東京大学)に引き継がれ、現在は3代目となる野中 誠氏(東洋大学)のもと、ソフトウェアの品質向上を目指して様々な活動を展開している。



[委員長在任期間]

菅野文友氏 (1980年5月～1994年3月)

飯塚悦功氏 (1994年4月～2012年3月)

野中 誠氏 (2012年4月～現在)

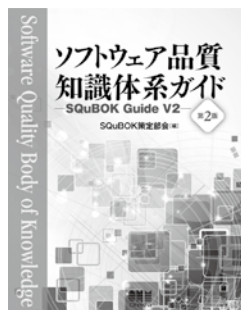
2 ソフトウェア品質知識体系ガイド (SQuBOK® Guide) の発行

ソフトウェア品質の暗黙知の形式知化、最新のテーマの整理と体系化を目的として、2007年に日本発のBOKとして、『ソフトウェア品質知識体系ガイド-SQuBOK Guide-』(SQuBOK策定部会編、オーム社)を発行した。同ガイドは、2008年度の日経品質管理文献賞を受賞した。

2014年9月に、その後のソフトウェアを取り巻く環境の変化を反映して、第2版を発行した。主な改訂点は、「開発技術の拡充」「安全、安心への対応」「国際規格改定への対応」である。

第1版、第2版の発行累計は2015年現在、10,000部を超えている。2011年には中国語版を発行し、現在、英訳の作業を進めている。

また、第1版発行に当たって記者会見ならびに発表記念講演会を、第2版発行に当たって発行記念講演会を実施し、SQuBOK®の内容だけでなく、SQuBOK®を核とした今後のSQiP活動について広く紹介した。



[SQuBOK 発表記念講演会] *第1版発行時

東京：2007年12月10日

(日科技連・本部)

*講演会の前に記者会見を実施

大阪：2008年2月9日

(関西大学・天六キャンパス)

[SQuBOK 発行記念講演会] *第2版発行時

東京：2015年2月9日 (日科技連・本部)

大阪：2015年2月9日 (中央電気倶楽部)

*オンラインライブスタイルで開催



記者会見の様子

3 ソフトウェア品質管理セミナー 実践セミナー

ソフトウェア品質のとらえ方の変化とともに、品質管理、品質保証、マネジメントにとどまらず、プロセス改善、プロジェクトマネジメント、開発手法、レビュー、テスト、メトリクス、資格対応コースなど、多岐にわたるセミナーを新規に開講した。

また、2011年には、集合教育に加え、eラーニング「ソフトウェア品質技術者セミナー」を開講し、2013年には東京会場で実施するセミナーを大阪・名古屋などの遠隔地会場へ同時中継して実施するオンラインライブセミナーを開始した。

[新規セミナー]

2010年

- ・ソフトウェア品質技術者初級セミナー
- ・基礎から学ぶソフトウェアメトリクスセミナー
- ・実践！ソフトウェア品質保証のためのメトリクス活用セミナー
- ・テスト技法とテストケース演習：入門コース
- ・ソフトウェア品質保証技術実践セミナー
- ・モダンソフトウェア テストアカデミー：プロフェッショナルコース

2011年

- ・2日でマスターするソフトウェアテスト

2012年

- ・JSTQB認定ソフトウェアテスト技術者-Foundation Levelトレーニングコース
- ・ソフトウェアテスト技法ドリルセミナー
- ・実践！直交表、All-pair法を用いた組合せテストと状態遷移テスト修得セミナー
- ・ソフトウェア品質部門のためのXDDP入門コース
- ・XDDPの導入、活用による開発プロセスの改善セミナー

2013年

- ・データ指向のソフトウェア品質マネジメントセミナー（基礎編・技法編）

- ・今日明日の実業務で使用するソフトウェア品質向上のためのなぜなぜ分析セミナー
- ・実践！エンジニアのためのチームビルディングセミナー
- ・現場で効果をあげる「ソフトウェア品質会計」の適用方法（初級）
- ・CFD⁺⁺：論理の設計とテストの技法：開発技術者向け

2014年

- ・実践！SaPIDによるソフトウェア開発のプロセス改善のための自律改善セミナー
- ・ソフトウェア品質向上のためのなぜなぜ分析活用事例フォローアップセミナー

[オンラインライブセミナー]

- ・基礎から学ぶソフトウェア品質マネジメントセミナー
- ・XDDPの導入、活用による開発プロセスの改善セミナー
- ・JSTQB認定ソフトウェアテスト技術者-Foundation Levelトレーニングコース

4 ソフトウェア品質シンポジウム (SQiPシンポジウム)

1981年に第1回を開催以降、年1回継続開催し、2015年で第34回を数える。2009年から半日の講義スタイルの「併設チュートリアル」と2日間の「本会議」で構成するスタイルで実施している。

参加者は一時、日本の景気減退とともに減少傾向であったが、2010年以降上昇傾向に転じ、2015年は3日間で延べ1,600名以上を集め、「ソフトウェア品質」に関する日本国内最大級のイベントに成長した。

コンセプトは「聴く、考える、話す」。ソフトウェアの品質向上を目指して、実際に企業で取り組んだ実践事例や最新のレビュー・テストの技術方法論などの一般論文発表のほか、時流にあった講演、セッションを企画している。

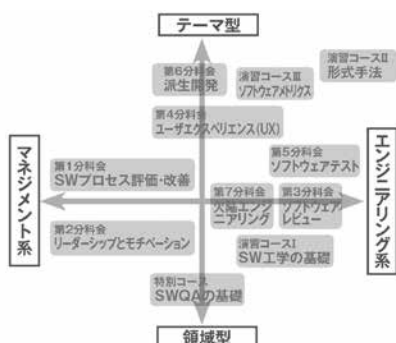
▶ SQiPシンポジウム

<http://www.juse.jp/sqip/symposium/>

5 ソフトウェア品質管理研究会 (SQiP 研究会)

1985年の発足から30年以上にわたり継続開催しており、2015年で第31年度を数える。各種製造業や建設業などから、ソフトウェア開発に携わる管理者、技術者、品質管理担当者など、参加者は延べ1,600名以上にのぼる。

ソフトウェア品質技術について、企業の枠組みを超えてメンバーが一堂に会して共同研究を行うスタイルはそのままに、現在「研究内容の更なる質の向上」「習得スキルの実務適用の定着化」を活動の2本柱に、SQiPシンポジウムや他学会への論文投稿へのチャレンジ、実践事例紹介の場の提供、情報交換などによるコミュニティの形成をはかっていくことを目標に、活発に活動している。定例会のほか、研究会の存在を広く知ってもらうことを目的に、2011年から「ミニシンポジウム」(2014年からは「OPEN DAY」に改称)を、本研究会の活動を実際に体験できるイベントとして企画・開催している。



第31年度分科会テーマの位置づけ



分科会討論風景 (2015年7月の会合)

6 ソフトウェア品質保証部長の会 ソフトウェア品質保証責任者の会の設立

ソフトウェアが私たちの生活の中で必要不可欠なものとなり、その品質の重要性が高まるにつれ、ソフトウェアの品質に責任を持つ部門の担う役割がますます大きく、また、重要になってきたことから、2009年11月にソフトウェア品質保証部門の長による「ソフトウェア品質保証部長の会 (以下、SQiP 部長の会)」を設立した。識者による講演やグループディスカッションを通して、品質保証戦略の立案や組織体制の構築、品質保証業務の改善、効果的な品質保証活動の事例の作成、開発現場への普及推進などについて議論し、技術交流・情報交換を行い、その成果をSQiPシンポジウムや成果発表会などで広く発信するなど、活発に活動中である。2015年11月に第7期の活動がスタートした。

また、SQiP 部長の会が東京開催のため、関西からの参加者の移動負担を軽減するべく、2011年に大阪に「ソフトウェア品質保証責任者の会」を設立した。対象を部門長職に限らず、品質に責任を負う方を広く対象とすることで、様々な立場・観点からの議論ができる場となっている。

7 世界ソフトウェア品質会議

1995年から全世界のソフトウェア品質の専門家が集まり、幅広く議論を行う国際会議として世界ソフトウェア品質会議 (WCSQ: World Congress for Software Quality) を、ASQ (アメリカ品質協会)、EOQ (ヨーロッパ品質機構)、日科技連の3団体で運営している。

第1回会議を1995年にアメリカ・サンフランシスコで開催したのを皮切りに、これまで第2回 (2000年) 日本・横浜、第3回 (2005年) ドイツ・ミュンヘン、第4回 (2008年) アメリカ・ワシントンD.C., 第5回 (2011年) 中国・上海、第6回 (2014年) イギリス・ロンドンで開催した。

第5回会議では、世界各国52件の発表の中

から選ばれた6件のAwardのうち4件を日本の発表が受賞し、日本の“ソフトウェア品質力”のレベルの高さを世界に証明した。



5WCSQ Award 受賞者

8 ASQNの設立

ASQN (Asian Software Quality Network) は、アジアの国際競争力強化、アジアにおけるソフトウェア品質に関わる技術、経験、人材の相互交流を目的として、2013年に設立されたネットワークである。参加国は中国、日本、韓国、マレーシアをはじめとするアジア諸国で組織され、日本は日科技連が事務局を担っている。

2013年に第1回がマレーシア・クアラルンプールで、2014年に第2回が中国・上海で開催され、2015年には第3回をカンファレンスとして東京の東洋大学・白山キャンパスにおいて開催した。



9 ソフトウェア品質国際ワークショップ

1989年に第1回ソフトウェア製品品質管理調査団を海外に派遣以来、2002年の第13次までは欧米を中心に、2003年以降はソフトウェア品質国際ワークショップとして、アジア地域に調査団を派遣してきたが、2007年の第22次のベトナム訪問を最後に派遣は終了した。

10 SQiPポータルサイトの設置

ソフトウェア品質に関して、一般に広く最新情報を発信し、蓄積してきた知識・技術などの

成果を公開することを目的に2008年にポータルサイトを設置した。サイト上での主な活動は以下の通り。

■ソフトウェア品質実態調査の実施

日本のソフトウェア品質に関する様々な課題の改善・向上のための活動の一つとして、2012年8月に第1回「ソフトウェア品質実態調査」を実施した。ソフトウェア品質に関する実態と変化を把握するため定期的に行っている。

本調査の結果はシンポジウムで発表するとともに、Webでも公開している。

■『ソフトウェア品質のホンネ』を開始

2005年に発刊したソフトウェア品質のための総合雑誌『クオリティワン』は、紙媒体からWebマガジンへと発行媒体を変え、2011年に発展的解消した。ポータルサイトの内容充実の一環として、2011年にSQiP運営委員のソフトウェア品質へのその想い・体験をコラム的に綴る『ソフトウェア品質のホンネ』を開始した。

■SQiPライブラリの設置

SQiP研究会やSQiPシンポジウムなどで得られた研究成果や論文などを一般公開している。「SQuBOK®分類検索」「フリーワード検索」で自在に検索できる。



▶ SQiP Library

<http://www.juse.jp/sqip/library/>

医薬統計・医薬関連

1 臨床試験セミナー統計手法専門コース 20周年記念行事

2010年3月20日に「臨床試験セミナー統計手法専門コース」(以下、BioS) 20周年記念特別セミナー、記念シンポジウム、記念パーティをホテルサンルート有明にて行った。

BioSは、製薬企業、医薬品開発業務受託機関、研究者主導研究を推進する機関で臨床研究に携わる統計解析家の養成を目的として、1989年に開設された。毎月2日間×12ヵ月、計24日間コースで、20年間で約1,100名の修了者を輩出してきた。

記念シンポジウムの後に催された記念パーティでは、第1回から第20回までの参加者・講師の方々が集い、話がつきることなく、交流の場となった。

*以下、○ BioSは受講生が卒業した開催回数

■記念特別セミナー

医薬・医療に関する最新的话题をテーマに2つの講義を行った。

「がん臨床試験デザイン フェーズⅠ、Ⅱ」

柴田大朗氏(国立がんセンター) * 7 BioS

「ゲートキーピング法による多重性の調整」

松山 裕氏(東京大学) * 3 BioS

■記念シンポジウム

BioSを卒業し、各職場で活躍されている方による、受講当時の思い出からBioS卒業生のキャリアパスにつながる将来に向けた講演があった。

【プログラム】

開会の挨拶：吉村 功氏

(東京理科大学名誉教授)

「BioSの現状」

浜田知久馬氏(東京理科大学) * 2 BioS

「アジアにおける臨床試験：将来展望」

巖 浩氏(イーピーエス株) * 1 BioS

「CDISC標準」

木内貴弘氏(東京大学医学部附属病院)

* 1 BioS

「PMDAにおける生物統計担当の役目」

上村鋼平氏(医薬品医療機器総合機構) * 15 BioS

「橋渡し研究におけるデータセンターの立ち上げを経験して」

伊藤陽一氏(北海道臨床開発機構) * 9 BioS

「医療・医薬分野における情報化とヒューマンウエア」

渡辺敏彦氏(株ベルシステム24) * 1 BioS

閉会の挨拶：大橋靖雄氏(東京大学)



吉村 功氏



大橋靖雄氏

2 医薬統計・医薬関連セミナー

医薬統計のみならず、ニーズに合わせて多岐にわたる医薬関連セミナーを展開し、4つのセミナー(3～6のセミナー)を新規に開設し、全10コースとなった。

[既存セミナー]

- ・ 臨床試験セミナー 統計手法入門1日コース
- ・ 臨床試験セミナー 統計：実習基礎コース
- ・ 臨床試験セミナー 統計手法コース
- ・ 臨床試験セミナー 統計手法専門コース
- ・ メディカルライティング教育コース
- ・ 臨床データマネジメントセミナー

3 薬剤疫学セミナー

2005年9月に薬剤疫学セミナー特別コース（1泊）を箱根の山のホテルにおいて開催し、2006年から本格的に、毎月2日間×6ヵ月の計12日間コース（そのほか予備コースが2日間）として開設した。

2015年には、派遣者や参加者のニーズに応じて、毎月2日間×4ヵ月の8日間コースにリニューアルを行った。

[内容]

薬剤疫学の基本とともに、薬剤疫学に必要な手法の基礎などが学べる。

[運営委員長・講師]

久保田 潔氏（東京大学）

4 メディカルライティング実践コース

2001年に開設した「メディカルライティング教育コース」の卒業生から、さらに上級コースで学びたいという要望に応え、2008年に「メディカルライティング実践コース」を2日間コースとして開設した。

[内容]

プロトコール、治験総括報告書といった文書の作成を通して、正確、簡潔、かつわかりやすい文書を作成するための技術を習得できるように、演習を中心とした実践的な構成となっている。

[講師]

林 健一氏（アラメディック株）

5 臨床試験セミナー
医薬品開発基礎コース

2008年に医薬品開発に必要な知識の習得を目指す「臨床試験セミナー 医薬品開発基礎コース」を3日間×2ヵ月の6日間コースとして開設した。前期3日間は、モニターを含めた臨床開発担当者を対象とした入門編で、後期3日間は、医薬品開発プロジェクトリーダーを対象とした中級編のコースであった。

翌年2009年に「新薬開発プロジェクトリーダー育成コース」と改名し、2日間×4ヵ月の8日間コースとして、1月目の2日間を入門編、2月目～4月目の6日間を中級・上級編としたコース内容に改訂した。

2010年には、プロジェクトリーダーに必要な知識や技術が体系的に身につくように、2日間×5ヵ月の10日間コースに改訂して、さらに内容の充実をはかった。

[講師]

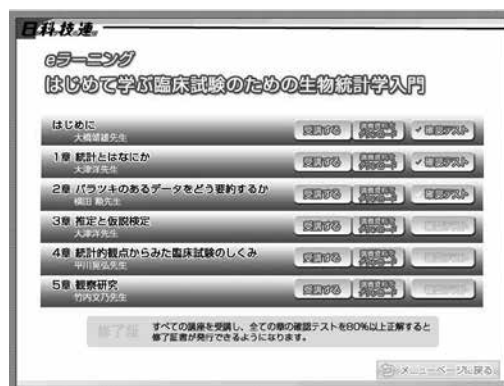
林 健一氏（アラメディック株）

6 eラーニング はじめて学ぶ臨床試験のための生物統計学入門

遠方のため、またはセミナー開催日に都合をあわせることが難しいという方のために、生物統計の概念を学べるeラーニングを2015年7月に開講した。

[内容] *標準学習時間6時間

統計とは何か？、バラツキのあるデータをどう要約するか、推定と仮説検定、統計的観点からみた臨床試験のしくみ、観察研究



QCサークル

1 QCサークル活動（小集団改善活動） 実態調査

QCサークル本部では、QCサークル活動（小集団改善活動）実態調査を、第1回（1979年）から定期的に実施し、2009年に第7回、2014年に第8回を実施した。

第8回では、日科技連賛助会員、QCサークル支部・地区幹事会社を中心に各社の推進事務局から316名、リーダーから160名、QCサークル未実施企業の窓口担当者43名の方々から、回答を得た。

本調査は、QCサークル活動（小集団改善活動）を導入・推進している企業・組織の方々に、全国的な調査結果をもとに、自分たちの活動の位置付けや、QCサークル活動の「工夫」のための第一歩として活用してもらうことを目的としている。

各企業・組織のQCサークルリーダーやメンバーは、自分たちと世間水準との比較を、また、推進者は職場全体の分布の中心やばらつきも考慮しながら、「現状認識」に活用することができる。

職場を取り巻く環境の変化は著しく、それぞれの現場において「変化への対応力」が、これまでもまして重要になっている。現場で発生する様々な状況に適応できる「活き活きとした職場」を実現するために、QCサークル活動（小集団改善活動）の本質を理解し、実現するための工夫が求められている。

本調査結果は、品質月間テキストとして出版している（第7回調査：テキストNo.372、第8回調査：テキストNo.407）。



2 QCサークル本部登録システム

1962年から現在まで継続している「QCサークル本部登録制度」は、2006年10月に登録方法を紙媒体からインターネットへとリニューアルした。また、2015年4月から本システムを利用して、2014年度以降の全国大会の発表原稿を閲覧できるサービスを開始した。

▶ QCサークル本部登録システム
<https://juse-qcch.juse.or.jp/qc/>

■ QCサークル本部登録方法のリニューアル

リニューアル後、インターネットの活用により、QCサークルの実状や実数などが把握でき、必要な情報をリアルタイムに利用者に提供できるようになった。登録費用は無料である。

このリニューアルに伴い、新システムでQCサークルの登録を行っていただき、2015年11月30日現在1,447社／51,093サークルが登録されている。

[リニューアルの主な特徴]

- ① インターネットで簡単にQCサークルの登録、修正、削除ができる
- ② ペーパーレスが可能である
- ③ 24時間Webシステムが利用でき、リアルタイムでデータが確認できる
- ④ 自社のQCサークル情報が閲覧・出力でき、活動状況の分析ができる
- ⑤ 登録されているQCサークルの業種別、職種別、県別などのデータが入手できる

■ QCサークル全国大会（小集団改善活動） 発表原稿閲覧サービス

QCサークル本部では、企業・組織におけるQCサークル活動（小集団改善活動）によって得られた改善成果を発表する場として、全国各地でQCサークル全国大会（小集団改善活動）を毎年5回開催している。これまで大会当日に

参加者に配付していた大会要旨集は、2014年度から冊子に代えてCDを配付し、さらに事前に発表原稿を閲覧できるようになった。

2015年4月からは、本部登録サークルへの更なるサービスとして、2014年度以降の全国大会の発表原稿を閲覧（ダウンロード）できるサービスを開始した。本サービスは、各社の現場の問題解決に活用したり、優秀な事例から技術力のある企業の発見など様々な場面に役立てることができる。

本部登録したサークルは、全国大会で発表することができるほか、全国大会へ本部登録メンバー料金で参加できる。本システムの活用とあわせて全国大会に参加することで、より効果的な学びの機会となる。

3 QCサークル大会 QCサークル全国大会（小集団改善活動）

1963年5月に仙台で第1回を開催したQCサークル大会は、現在もQCサークル支部・地区の協力により全国各地で年間100回以上開催し、2015年現在5,700回以上を数える。

QCサークル本部が主催する年5回のQCサークル全国大会（小集団改善活動）は、ここ数年は製造業以外にも、事務・販売・サービス〔医療・福祉含む〕部門からの発表、また近隣国の中国からの発表エントリーも増えてきている。

全国大会での発表、聴講者の多くは、社内大会などで優秀な成績をおさめたサークルも多く、大会への参加は企業内では成果への報酬、企業貢献としての位置付けも大きく、サークルメンバーの目標となっている。

特に札幌、宜野湾大会では、発表件数が160件以上にもおよび、職場の問題解決、コストダウン、品質向上、工数低減などの体験事例が発表され、各社・組織における改善のベストプラクティスが集まるといっても過言ではない。

大会は2日間で開催し、初日は各会場に分かれての体験事例発表の後、講演を行っているほか、1996年の一関大会からは、感動と共感を覚えた発表サークルに対し参加者全員が投票・

選出し表彰する、みんなで選ぶ大会賞「QCサークル感動賞」の授与を行っている。

2日目の午前は、各支部から推薦された優秀な改善事例の招待発表が行われ、発表サークルには、「QCサークル本部幹事長賞」の楯が贈られる。午後は、近郊企業への事業所見学交流会や各地の産業・風土・文化を見学する産業見学会を実施しており、参加者から好評を得ている。

4 第5000回記念QCサークル全国大会 （小集団改善活動）

QCサークル全国大会（小集団改善活動）は通算5,000回を迎え、2008年5月22日～23日に日本青年館（東京）にて第5000回記念大会を開催した。「QCサークル活動の温故知新－新たな飛躍に向けて－」を大会テーマに、(株)小松製作所の坂根正弘氏による基調講演、日本体育大学女子短期大学部の山本 博氏による特別講演があった。体験事例発表は87件行われ、近年の活動の拡がりを反映し、福祉・医療関係のほか、中国からも発表があった。

また、本大会の目玉企画として、特別企画公開インタビュー「QCサークル活動（小集団改善活動）の本音を聞かせて」が行われた。現場最前線のメンバーと推進者の両側の意見が飛び交ったインタビューは、活動に取り組むうえで参考になる意見を多く聞くことができた、との声に参加者から多く寄せられた。

同大会と併催で「第1回事務・販売・サービス〔含む医療・福祉〕部門全日本選抜QCサークル大会（小集団改善活動）」を開催した。



公開インタビュー

5 全日本選抜QCサークル大会 (小集団改善活動)

全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)は、1970年の第1回からQCサークル活動(小集団改善活動)の「甲子園」と称し、毎年、日比谷公会堂(東京)で開催してきた。第40回(2010年)までは日比谷公会堂で行ったが、会場の老朽化などの問題もあり、第41回(2011年)から、東京ビッグサイトへ会場を移すこととなった。

本大会では、QCサークル各支部から推薦されたサークルの地道な努力とチャレンジ精神、人と人との絆、個の力と輪の力の連携、ベテランの知恵と工夫、若手の成長、改善力の向上など、活動を通じた日頃の成果が発表され、毎回レベルの高い内容となっている。

2015年11月10日に第45回大会が開催され、8サークルに本部長賞金賞が、10サークルに本部長賞銀賞が授与された。



授賞式

6 事務・販売・サービス(含む医療・福祉)部門 全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)

事務・販売・サービス部門などの全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)の開催を望む声を受けて、2008年に新設した大会である。第1回は前述の第5000回記念QCサークル全国大会(小集団改善活動)と併催で行われ、2015年6月に第8回大会が開催された。

これまでに91サークルが出場し、事務・販売・サービス部門に加え、病院、福祉施設や自衛隊など、様々な職場からの発表が行われている。

全日本選抜QCサークル大会(小集団改善活動)と同様に、出場サークルには、本部長賞金賞または銀賞が授与される。

7 QCサークル活動(小集団改善活動) 優良企業・事業所表彰の創設

本表彰は、QCサークル誕生50周年を記念し、長年にわたり企業・組織の本社・事業所・工場などにおけるQCサークル活動(小集団改善活動)の更なる発展を期して、2012年に制定し、2013年から実施した表彰制度である。

職場の活性化・レベルアップをはかり、支部長会社、地区長会社、幹事会社として、地域の活性化に大きく貢献している企業・事業所を表彰し、活動の更なる発展と飛躍につなげることを目的としている。

表彰は次のすべてに該当し、他の模範となる企業・事業所を積極的に表彰する。

- (1)QCサークル活動(小集団改善活動)の基本理念に則り積極的な活動を展開し、企業・組織の体質改善・発展と地域社会に貢献している企業・事業所
- (2)企業・組織が目指すべき活動に積極的に取り組み、職場の活性化をはかっている企業・事業所
- (3)継続して支部・地区活動の活性化・発展に貢献している企業・事業所または、幹事会社として長年にわたり地域の活性化に大きく貢献している企業・事業所

表彰式は、各支部の総会や大会で行い、表彰状と楯が授与される。2015年度までに39組織が表彰されている。



表彰楯

8 QCサークル本部幹事長賞の創設

本賞は、QCサークル誕生50周年を記念し、QCサークル活動（小集団改善活動）の一層の活性化と更なる企業・組織の品質改善・向上を目的として2012年に制定し、2013年から全国大会での発表、賞の授与を実施した。

年度ごとに各支部から1件のサークルが推薦され、受賞サークルは、全国大会のプログラムで行われる「支部推薦 優秀改善事例招待発表」にて発表を行い、QCサークル本部幹事長賞の楯が贈られる。

受賞サークルは、各支部で開催している改善事例大会やチャンピオン大会などで選考された支部を代表する優秀なサークルで、全国のQCサークルの模範となるサークルである。

2015年度は8サークルの受賞が決定しており、受賞件数はこれまでに25サークルとなった。



表彰楯

9 QCサークル洋上大学 QCサークル ASEAN訪問・洋上研修

QCサークル誕生50周年を迎え、本研修の更なる発展を期して、2013年に名称を「QCサークル洋上大学」から「QCサークル ASEAN訪問・洋上研修」に改称し、経済成長著しい魅惑の市場・ASEAN地域の「新たなものづくり国」を訪問している。1971年に第1回を開催し、2015年で第57回を数える。

本研修は、船内研修と海外での企業見学交流、現地研修により、発展する新興国から新たな「価値観」を学び、一人ひとりが見識を高めて「明日の日本の“ものづくり”を担う人材への成長」、いわゆる次世代に求められる日本の「グローバル人材」の育成に主眼を置いている。

時代に求められる価値ある製品とサービスを提供するため、職場第一線で活躍する社員、ス

タッフ、管理・監督者が、日常とは異なる環境から得られる参加者との一体感と現地のQCサークルとの相互の交流を通して見聞を広め、「社員の意識改革」と「考える人材の育成」をはかり、人間力・仕事力と、職場力・組織力・企業力の向上をはかっている。



第57回集合写真

10 QC手法基礎コース

品質管理の基本的な考え方やQC七つ道具を講義だけでなく演習を交えた参画型カリキュラムであり、初めて品質管理・QC手法を学ぶ方でも品質管理の基礎を速修できるコースとして2006年に開設した。

〔内容〕2日間

品質管理、データのとり方・まとめ方、問題解決の手順、個人演習、グループ演習など

〔講師〕

岡田高美（日科技連）、池部信夫氏（㈱QMI）、平野綾子氏（統計コンサルタント）、保科 昇氏（元 日本ビクター㈱）ほか

11 品質改善のための問題解決力実践コース

「問題解決力」の向上に不可欠な知識力、コミュニケーション力、解析力など8つの力の向上をはかり、講義・グループ演習を通じてデータの収集のポイント、目的に応じたQC手法の使い方、問題解決の手順を用いた効果的改善方法、効果的なプレゼンテーション方法を習得するコースとして、2006年に開設した。

[内容] 4日間

問題解決力自己診断, 品質管理, QC七つ道具, QC的ものの見方・考え方, 問題解決の進め方, 問題解決力向上演習など

[講師]

岡田高美, 瀧沢幸男, 鈴木 聡, 松田啓寿 (日科技連) ほか

12

お客様へのサービス向上のための 問題解決力実践コース

どうすればお客様へのサービス向上ができるのかを, サービスクオリティとQC的ものの見方, 考え方の観点から解説し, グループ演習を通じて実践的に活用, 体得するコースとして, 2006年に開設し, 2011年度まで実施した。

[内容] 2日間

問題解決力自己診断, 顧客満足の考え方と向上, サービスクオリティ実現のステップ, QC的ものの見方・考え方, お客様へのサービス向上に役立つ手法, 問題解決力向上演習など

[講師]

池部信夫氏 (㈱QMI), 金子憲治氏 (サービス経営研究所)

13

人を育てるコーチングセミナー

コミュニケーションを豊かにし, 人の無限の能力を引き出すツールとして, リーダー, 管理者の必須アイテムである「コーチング」を学び, コミュニケーションスキルの講義にとどまらず, エクササイズ (体験学習) を通じて「人づくり」「組織づくり」「QCサークルの運営」に活用できるセミナーとして2007年に開設した。

[内容] 2日間

人を育てるコーチング, 時代の変化が求めるもの, コミュニケーションとは, コーチングとは, コーチングの実践と大切な3つのスキル (傾聴のスキル・承認のスキル・質問のスキル), コーチングと自己形成など

[講師]

国分正義氏 (つくば品質総合研究所)

14

施策実行型QCストーリーセミナー

「施策実行型QCストーリー」について理解し, 手順を習得するセミナーとして2007年に1日コースとして開設した。2013年度から, 改善における3つの型 (問題解決型, 課題達成型, 施策実行型) の各ストーリーの使い分け, 正しい選択の仕方などを加えてカリキュラムの改定を行い, 2日間コースとした。

[内容]

改善と問題解決型QCストーリー, QCストーリーの選択, 施策実行型QCストーリーのポイント, 事例に学ぶ (問題解決型, 施策実行型), グループ演習など

[講師]

須加尾政一, 羽田源太郎 (日科技連)

15

現場力を高める「見える化」と「ムダ取り」 の実践セミナー

「見える化」によって生産活動の問題や異常を浮き彫りにし, 価値を生まない「行動 (動作), もの, 仕組み, ルール」のムダを徹底的に排除して, 利益を創出する企業体質を構築するためのノウハウを習得するセミナーとして2010年に開設した。

[内容] 1日

職場の競争力向上と現場力向上, 「見える化」, 「ムダ取り」, 職場の管理と改善, 一人ひとりの「品」の質向上と「個」有技術向上, 演習 (グループワークの出来ばえ向上とムダ排除で時間短縮をはかる) など

[講師]

市川享司氏 (パワーアップ研究所), 瀧沢幸男 (日科技連)

16

なぜなぜ分析2日間実践セミナー

問題 (事象) に対する明確な「なぜなぜ分析」の展開方法を習得し, 論理的に「なぜなぜ分析」を正しく展開するノウハウを具体的に学び, 的確な再発防止策を導き出す改善力を養う

セミナーとして2011年に開設した。

〔内容〕 2日間

原因追究の盲点、なぜなぜ分析の狙い、なぜなぜ分析10則、なぜなぜ分析演習（個人・グループ）など

〔講師〕

小倉仁志氏（㈲マネジメントダイナミクス）

17 QC検定3級対応セミナー

QC検定レベル表の3級出題範囲から、3級合格に向けた“傾向と対策”について講義。過去の出題問題から理解度テストを実施し、“検定試験への適応力を身につける”ことを目的とするセミナーとして2012年に開設し、2013年度まで実施した。

〔内容〕 2日間

QC検定3級のポイント（実践編、手法編）、QC的ものの見方・考え方、管理と改善の進め方、プロセス管理、問題解決型QCストーリー、検査および試験、標準化、データの取り方・まとめ方、QC七つ道具、新QC七つ道具など

〔講師〕

福丸典芳氏（㈲福丸マネジメントテクノ）ほか

18 人間力・現場力を高める ワンポイント講座

力のある“人財”「自立型人材（財）」となるために、問題発見・解決する組織力、コミュニケーション力、変化への対応力、チャレンジ精神、創造性など「人間力・現場力を高める」ための方法を学ぶ講座として2012年に開設し、2014年度まで実施した。

〔内容〕 1日

企業経営と品質管理の基本、良い仕事の進め方、改善活動の着眼点、教育・訓練で自己磨き、職場の人間関係・コミュニケーションの向上、グループ討論など



〔講師〕

市川享司氏（パワーアップ研究所）

19 現場力強化のための 人為ミス未然防止セミナー

ボカミスやヒューマンエラーといった人的要因によるミス（人為ミス）を未然に防止するために、作業手順や判断の中からできる限り“あいまいさ”を取り除いた日常管理手法である「A-KOMIK」を習得するセミナーとして、2015年に開設した。

〔内容〕 1日

未然防止の考え方、A-KOMIKの基本スキルと目指す姿、教える教科書（指導マニュアル）の作成演習、すぐに使える未然防止10のヒントなど

〔講師〕

中山賢一氏、富澤祐子氏（A-KOMIK指導講師）

エイ コミック A-KOMIK	
A ：あいまいさを見つける	M ：守らせる
K ：決めごとを決める	I ：異常を見つけ処置する
O ：教える	K ：改善する

20 問題解決・QC手法指導の インストラクター養成講座

QCサークルのメンバー・リーダーが陥りやすい、間違った「問題解決の進め方」「QC手法の作り方・使い方」「なぜなぜ分析の活用」について、指導ポイントと教え方のノウハウを実例から学ぶ指導者育成のためのセミナーとして、2015年に開設した。

〔内容〕 1日

「問題解決の進め方」「QC手法の作り方」「なぜなぜ分析の活用」に対する指導ポイント、教え方、指導方法のポイントなど

〔講師〕

瀧沢幸男（日科技連）

ISO審査・登録

1 食品安全マネジメントシステム

各国において年々増える食品事故や事件を背景に、フードチェーンにおいて食品の安全な提供に関わる様々なリスクを低減し、HACCPの食品衛生管理手法をもとに、消費者への安全な食品提供を可能にするための食品安全マネジメントシステム規格が2005年9月に発行された。

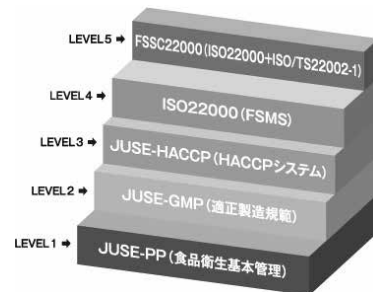
日科技連は、2008年8月に日本適合性認定協会（以下、JAB）より認定を受けた。全国各地での導入説明会や、時宜を得た食品安全上のテーマを掲げた特別講演会を多数開催し、食品業界における一般的衛生管理の必要性、自組織の業態や特性に合った管理手段の選択などについて理解を深める機会を提供してきた。

ISO 22000の審査対象である全13カテゴリの中で、業界最多の12カテゴリ（K：装置の製造以外）の認定を受け、幅広い分野に対応できる体制を整えた。審査登録件数は、2015年現在、100件を超え、業界第2～3位である。

また、「日科技連総合的食品安全管理認証システム」を同時に立ち上げた。これは、各事業者の目的や規模、衛生管理体制の程度に合わせての取り組みが可能な認証システムで、現在の管理レベルを把握するギャップ診断としても活用されており、今後ますますの需要が見込まれる。
[日科技連総合的食品安全管理認証システム]

- ・ JUSE-PP
一般的食品衛生管理の視点でのチェック
- ・ JUSE-GMP
適正製造規範の視点でのチェック
- ・ JUSE-HACCP
HACCP手法に基づく安全管理システム

▶ JUSE-PP/GMP/HACCP
<https://www.juse-iso.jp/jusepp/>



日科技連総合的食品安全管理認証システム概念図

2 GFSI 食品安全認証スキーム

国際食品安全イニシアチブ（GFSI）の食品安全認証スキームの一つでもあるFSSC 22000を、すでに審査登録事業を行っていたISO 22000とともに2011年4月から審査登録事業を開始し、2012年5月にJABより認定を受けた。
[認定を受けているカテゴリ]

- C：加工1（腐敗し易い動物性製品）
農業生産後のすべての活動、例えば、と殺を含む
- D：加工2（腐敗し易い植物性製品）
- E：加工3（常温での長期保存品）
- L：（生）化学製品製造
- M：包装材料製造

3 情報セキュリティマネジメントシステム

これまでBS7799に基づいた国内での認証基準（ISMS Ver.2.0）から、ISMS認証基準としての国際規格ISO/IEC 27001が2005年に発行され、JIS Q 27001を認証基準とした国際的な制度へと移行された。日科技連は、2002年11月に国内で5番目の審査登録機関として日本情報経済社会推進協会（以下、JIPDEC）より認定を受けた。

登録組織は、情報関連企業を中心に他業種での認証も多く見られる。審査登録件数は、2015年現在、260件を超え、業界第3～4位である。

4 ITサービスマネジメントシステム

「組織におけるITサービス運用管理の品質を継続的に向上させることによりわが国のITサービス全体の信頼性の向上に貢献することを目的にした」規格として2007年に発行され、認証制度も同時にスタートした。日科技連は、2007年11月に国内で4番目の審査登録機関としてJIPDECより認定を受けた。審査登録件数は、2015年現在、15件を超え、業界第3位である。

5 ISO 27001とプライバシーマーク 同時審査を開始

かねてから、各組織様から寄せられていた声として、ISO 27001とプライバシーマーク（PMS）の同時（同日）審査を可能にすべく、2012年8月に情報サービス産業協会（JISA）と業務提携を締結した。

【同日審査の主なメリット】

- ・ISMSとPMS両方の専門性を有する審査員が担当することで、それぞれのマネジメントシステムの構築度合い、運用状況、成熟度を的確に捉えたばらつきの少ない柔軟な審査が可能となる。
- ・審査回数も削減でき、受審準備や審査対応にかかる事務局の負担を軽減できる。

6 事業継続マネジメントシステム

企業を取り巻く環境が犯罪やテロ、自然災害など不測の事態をどう克服するか、最小限に食い止めるかが問われる状況において、その時代のニーズに応えるべく、日科技連ではBS 25999-2を認証基準に、2009年10月に審査登録事業を開始した。

7 ASRPがJABより認定される

ISO 9001、14001を適用規格にしたもので、組織のマネジメントシステムの成熟度に応じた

審査方法を日科技連が設計し、実施するための手順であるASRP（先進的サーベイランス・更新審査の手順）について、2010年6月にJABより認定を受けた。

各組織が実施している内部監査に審査員が立会うことにより、組織で行う内部監査のレベルアップにつながり、かつ、マンネリ化の打破にも有効であるため、今後さらに注目される審査手法である。

8 マネジメントシステム監査員検定制度

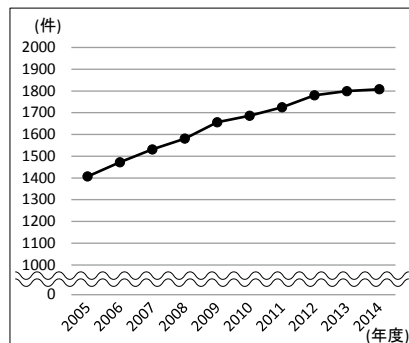
マネジメントシステムの有効性を高めるための重要な要素である、監査員（内部監査員、第三者監査の監査員など）の力量向上とその力量の把握を目的として、2011年に「マネジメントシステム監査員検定制度」を設けた。2015年現在、9回実施し、受験者数は約6,400名である。



9 道路交通安全マネジメントシステム

道路交通事故による死亡・重傷事故の徹底撲滅を目的として2012年11月に発行された規格をもとに、日科技連では2012年12月よりパイロット審査を開始した。審査登録件数は、2015年現在、10件を超え、業界第2～3位である。

また2014年4月より、自組織の管理レベルの現状把握・現状から見える改善点の洗い出しにつながる「道路交通安全ギャップ診断」を立ち上げた。



ISO 審査登録センター登録件数の累積推移

ISO研修

1 品質マネジメントシステム

「ISO 9000 審査員研修コース」は、2014年度から5日間連続コースに加え、分割コースを実施した。「ISO 9000 プロセスアプローチによる内部監査技法習得セミナー」は、2007年度に新設し、2013年度まで開催した。

2008年12月にJIS Q 2008:2008が発行され、改正に伴う内容の解説については、「要求事項の詳細解説コース」にて対応した。

2008年版の改正の目的は、①要求事項の明確化、曖昧さの除去、②ISO 14001との整合性の向上のため、要求事項の追加や変更はなく、追補改正版であった。

[2015年開催コース]

- ・ ISO 9001 入門コース（1日）
- ・ ISO 9001 要求事項の解説【移行対応】コース（1日）
- ・ ISO 9001 内部監査員コース（2日）
- ・ ISO 9001 内部監査員スキルアップコース（2日）
- ・ ISO 9001 CPD 対応コース（1日）
- ・ JRCA 承認ISO 9000 審査員研修コース（5日）

2 環境マネジメントシステム

「ISO 14000 審査員コース」は、1998年に開設し、2013年まで開催した。

[2015年開催コース]

- ・ ISO 14001 入門コース（1日）
- ・ ISO 14001 要求事項の解説【移行対応】コース（1日）
- ・ ISO 14001 内部監査員コース（2日）

3 情報セキュリティマネジメントシステム

「ISMS 審査員研修コース」は、2004年に開設し、2014年まで開催した。

新規コースは、2006年に「ISMS 入門コース」と「経営者のためのISMS 1日コース」（2006年のみの実施）を開催し、2010年から「ISMS リフレッシュコース」（現 ISMS CPD コース）を開催した。

2013年にISO/IEC 27001の改正があり、2014年3月にJIS Q 27001:2014が発行された。改正に伴う解説については、「要求事項と管理策の詳細解説コース」にて実施した。

[2015年開催コース]

- ・ 情報セキュリティと個人情報保護法の実践コース（1日）
- ・ ISO/IEC 27001 入門コース（1日）
- ・ ISO/IEC 27001 要求事項と管理策の詳細解説コース（2日）
- ・ ISO/IEC 27001 内部監査員コース（2日）
- ・ ISO/IEC 27001 CPD 対応コース（1日）

4 食品安全マネジメントシステム

食の安全性への取り組みが重要視される中、食品安全マネジメントシステム（FSMS）の国際標準規格ISO 22000が2005年9月に発行された。同年、FSMSの全体像を習得できるファーストステップコースとして、「ISO 22000 食品安全マネジメントシステム入門コース」を開催した。

2007年には、「ISO 22000 食品安全法規 完全マスターコース」と「ISO 22000 食品安全マネジメントシステム構築・運用コース」を開催した。さらに2009年には、「ISO 22000 食品安全マネジメントシステム要求事項の解説コー

ス」を開催した。

[2015年開催コース]

- ・ ISO 22000 入門コース（1日）
- ・ ISO 22000 構築運用コース（2日）
- ・ ISO 22000 内部監査員コース（2日）

5 ISO/TS 16949 コース

2004年から開催しているISO/TS 16949関連のセミナーは、2015年現在、下記2コースを開催している。

- ・ ISO/TS16949 要求事項の解説コース（2日）
- ・ ISO/TS16949 内部監査員コース（2日）

6 道路交通安全マネジメントシステム

道路交通安全のために組織が取り組むべき要求事項を定めた規格（ISO 39001）が2012年に発行された。同年、「道路交通安全マネジメントシステム入門コース」を開催した。

2015年現在、「ISO 39001 入門と要求事項の解説コース」（1日）を開催している。

7 そのほか新規セミナー

- ・ 労働安全衛生マネジメントシステム内部監査員コース（2日） * 2008年7月開催
- ・ 統合マネジメントシステム内部監査員コース（2日） * 2008年8月開催

- ・ 次世代内部監査実践活用セミナー
～経営ツールとしての目的達成型監査モデルの活用～（2日） * 2010年8月開催
- ・ ISO七つ道具実践活用セミナー：入門編（2日） * 2010年8月開催
- ・ ISO 9004 徹底解説セミナー（1日）
* 2011年1月開催
- ・ 環境マネジメントのための環境法令の勘所と順法管理システムの構築セミナー（1日）
* 2011年7月開催
- ・ 事業継続マネジメントシステム入門コース（1日） * 2011年10月開催

8 JRCA登録のCPD対応コース

マネジメントシステム審査員評価登録センター（JRCA）で求められる審査員の継続的専門能力開発（CPD）の対象コースとして、2015年度は品質マネジメントシステム、情報セキュリティマネジメントシステムの以下のコースが対応している。

- ・ ISO 9001 内部監査員スキルアップコース
- ・ ISO 9001 要求事項の解説【移行対応】コース
- ・ ISO 9001 CPD 対応コース
- ・ ISO/IEC 27001 CPD 対応コース
- ・ ISO/IEC 27001 要求事項と管理策の詳細解説コース
- ・ 情報セキュリティと個人情報保護法の実践コース



講師派遣・出張研修

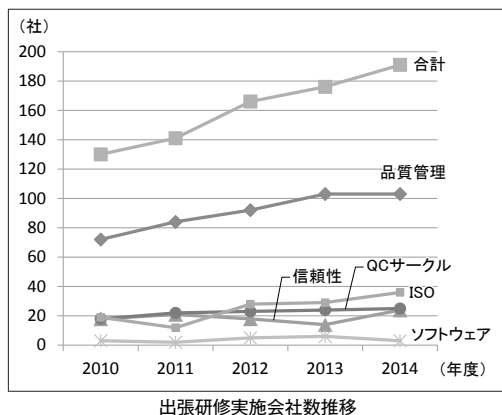
1 講師派遣

日科技連では、年間で開催している約130種類のセミナーに加えて、個別の企業・組織からのご要望により、日科技連の主力の講師陣を中心として、講師を企業・組織に派遣して行う出張研修ならびに講演会を提供している。

講師派遣・出張研修の最大のメリットは、業務の都合や時間、地理的な事情により、役員、社員を日科技連の定例セミナーに派遣できない場合など、社内の会議室や研修施設にて、ほぼ各企業・組織の計画に合わせて、一度にまとまった人数の社員を教育できるという点にある。

出張研修の受注会社数は年々増えており、その主な理由は、日科技連の強みでもある統計的品質管理（SQC）、品質経営（TQM）を中心に、顧客への価値提供を基本に活動したことにある。また、東京近郊での受注に加え、大阪事務所のある関西エリアでの受注の増加も理由の一つである。

分野別で分析すると、ここ数年、「品質管理」が全体の約半数を占めており、「信頼性」「QCサークル」も増加傾向にある。中でも、「ISO」はこの5年で倍増しており、出張研修としてのニーズの高さがうかがえる。



2 出張研修

出張研修で実施している主なプログラムは以下の通りで、日科技連が定例で開催しているセミナーの中からプログラムが選択できる。

[実施プログラム例]

- ・品質経営（TQM）、方針管理
- ・統計的品質管理手法（SQC）
- ・実験計画法、多変量解析法
- ・QC的問題解決法
- ・信頼性工学
- ・信頼性手法FMEA/FTA
- ・QCサークル関係
- ・品質機能展開（QFD）
- ・ソフトウェア品質関係
- ・ISOマネジメントシステム関係

3 講演会

各企業・組織の社内で開催する講演会では、特に11月の品質月間行事の一環で開催するイベントとして、毎年多くの企業・組織から依頼を受け、様々なテーマに応じて当該分野の専門講師を派遣している。

年次により変化はあるが、主に輸送用機器、電機、化学、建設などの業界を中心とした企業・組織での開催実績が多数あり、依頼・相談件数も増加の傾向にある。

[講演テーマ例]

- 「企業競争力を高める TQM の導入・活用」
- 「再発防止・未然防止に役立つ失敗学」
- 「現場の QC 力を高めよう」
- 「強い企業体質を目指す“改善活動”」
- 「ヒューマンエラーによるトラブル・事故を防ぐ」

[講師派遣・出張研修 実施までの流れ]

(1)相談受付

- ・ご相談，お問合せの受付
- ・セミナー目的・ねらいの確認
日科技連の職員が受注先会社の担当者と打ち合わせを行い，現状の把握，研修の目的・ねらいなど，細かく希望を確認。

(2)研修会の企画

- ・企画の提案
相談・依頼の内容に応じて，研修会企画，カリキュラム，指導講師を提案。
- ・見積書提示

(3)研修会の準備

- ・お申し込み
企画内容，指導講師，開催日程，場所，参加者数などを決定し，正式にお申し込みいただく。
- ・テキスト・資料などの準備
研修内容に基づきテキストや資料の作成，選定，発注を行う。

(4)研修会の実施

- ・研修会の実施
実施当日，日科技連職員が準備や運営を全面的にサポート。
- ・費用の請求

(5)セミナー実施後のフォロー

- ・研修会の評価
研修会の成果や効果をどのように実務に活用するかなどアドバイスし，実施後のフォローをする。
- ・今後のご提案
今後，更なる教育研修の充実に向けて，関連分野の教育企画を提案。



企業の品質経営度調査

2004年にはじまった企業の品質経営度調査は、産業界に対して「品質」の重要性の再認識をうながすことなどを目的に、日科技連と日本経済新聞社が共同で実施しており、2014年までに計8回実施した。わが国企業の品質経営の実態を把握するとともに、企業ごとの品質経営の水準を評価する上での一つの指標として活用されている。

調査実施年には、12月に報告講演会を行っている。

2009年の第5回調査から、「優秀企業賞」として総合ランキング上位5位の企業を表彰している。

■『ものづくり日本の品質力』の発行

本調査は、日本のものづくり企業の「品質力」、すなわち品質経営の実態を評価し、特徴の抽出や課題の発見を行っており、同時に、品質経営のありたい姿を示すガイドの役割も担っている。

過去5回の調査の解析結果をフィードバックするとともに、ものづくり企業の「品質力」の現状と課題を述べ、わが国を代表するものづくり企業の品質経営の取り組みとベストプラクティスを紹介した、わが国初の日本のものづくり企業の“品質白書”として、2010年に『ものづくり日本の品質力』を発行した。

『ものづくり日本の品質力』

企業の品質経営度調査

企画委員会 編

長田 洋 編著

(東京工業大学大学院)

日科技連出版社発行



■フォローアップ調査の実施

2013年以降は、品質経営の水準を向上させるために、企業が品質活動に取り組み、その活動成果を1年後の調査で評価するには時間的にも難しいとのことから、本調査を隔年で実施す

ることとした。

しかしながら、過去の調査項目の中で、とりわけ、「市場不良コスト（売上高比率）」「社内不良コスト（売上高比率）」に関しては、業界ごとの実態、他社との比較において、ぜひ、継続的にデータを参考にしたいという要望を多数いただいた。そこで、2013年は調査データの継続性と活用の視点から、これまでのフルバージョンの調査ではなく、不良コストに関する実態を把握するための調査を「品質経営度フォローアップ調査」として実施し、170社の企業から回答いただいた。

【フォローアップ調査概要】

調査テーマ：「市場不良コスト（売上高比率）」

「社内不良コスト（売上高比率）」の継続的データ活用と調査協力企業へのフィードバック

調査期間：2013年7月25日～9月30日

調査対象：日本国内の主な製造、建設、ITサービス企業

調査社数：608社／うち回答社数170社
(回答率28.0%)

■今後に向けて

2015年に本調査の専用Webサイトを開設した。過去のランキング結果も閲覧可能であり、本調査に関心のある企業にはぜひご覧いただきたい。2016年には、第9回の調査実施を予定している。多くの企業に本調査へのご協力をお願いしたい。



▶ 専用サイト

<http://www.juse.or.jp/jqr/>

[第3回調査]

- (1)調査期間：2007年6月1日～7月下旬
 (2)調査社数：523社／うち回答社数：215社
 (回答率41.1%)

[第4回調査]

- (1)調査期間：2008年6月2日～7月18日
 (2)調査社数：530社／うち回答社数：227社
 (回答率42.8%)

[第5回調査]

- (1)調査期間：2009年6月1日～7月15日
 (2)調査社数：600社／うち回答社数：225社
 (回答率37.5%)

[第6回調査]

- (1)調査期間：2010年6月1日～7月20日
 (2)調査社数：643社／うち回答社数：249社
 (回答率38.7%)

[第7回調査]

- (1)調査期間：2012年7月2日～8月21日
 (2)調査社数：651社／うち回答社数：217社
 (回答率33.3%)

[第8回調査]

- (1)調査期間：2014年7月8日～8月22日
 (2)調査社数：602社／うち回答社数：192社
 (回答率31.9%)

第3回～第8回 総合ランキング

順位	第3回 2007年	第4回 2008年	第5回 2009年	第6回 2010年
1	シャープ	富士フイルムHD	パナソニック	富士フイルムHD
2	トヨタ自動車	シャープ	富士フイルムHD	パナソニック
3	除外*	トヨタ自動車	シャープ	ジーシー
4	富士フイルムHD	大日本印刷	トヨタ自動車	東芝
5	アイシン精機	アイシン精機	アイシン精機	大日本印刷
6	大日本印刷	日立製作所	東芝	住友金属工業
7	日立製作所	セイコーエプソン	デンソー	NECアクセステクニカ
8	住友ゴム工業	ジーシー	大日本印刷	富士通
9	NEC	清水建設	富士通	富士ゼロックス
10	デンソー	富士ゼロックス	日立製作所	シャープ

*第3回第3位の企業は諸般の事情により企業側からの申し出がありランキングから除外した。

順位	第7回 2012年	第8回 2014年
1	東芝	コニカミノルタ
2	富士フイルムHD	ジーシー
3	大日本印刷	富士通
4	パナソニック	富士フイルムHD
5	シャープ	シャープ
6	ジーシー	キャノン
7	富士通	アサヒグループHD
8	ソニー	ソニー
9	キャノン	東芝
10	NECアクセステクニカ	大日本印刷



報告講演会

調査実施年は12月に報告講演会を開催し、ランキング上位企業の講演、調査の解析結果を報告している。

賞・表彰

1 デミング賞

■デミング賞運営委員会設置

デミング賞の基本戦略などを議論する場として、2007年10月にデミング賞運営委員会を新たに設置した。当時、バブル崩壊や企業のグローバル化に伴う海外現地生産、IT化など、企業を取り巻く環境が複雑かつ変化してきており、特に国内応募企業数が低迷していた。これに対する対応に加え、TQMそのものの有効性や取り組みの方法の再検討もあわせて検討してきた。本運営委員会の設置により、賞の位置付けやフレームワークなどの基本戦略を再検討し、「賞の一本化」「応募資格の柔軟化」「賞の名称変更」などの施策を実行した。

■デミング・イノベーション・プログラム

デミング賞委員会では、“実践力”（職場力・現場力・人材力などの「組織能力」）を継続的に維持し、さらに高めていく、という点について、産業界各企業の実践力の向上の一助となること、およびTQM活動の重要性の認識をさらに高めていくことを目的に、2006年にデミング・イノベーション・プログラム（DIP）の準備委員会を設立し、2007年に実施した。

【TQM進化促進プロジェクト】

経営環境の変化によって新たに生じてきたTQM推進上の課題について、デミング賞受賞企業とデミング賞実施賞小委員会委員とが一緒に取り組み、TQMの進化をはかるため、共同研究を行うプロジェクト。

【TQM成功事例調査ワーキンググループ】

デミング賞実施賞は、経営環境に適応した積極的な顧客指向の経営目標・戦略が策定され、その実現に向けて、TQMが適切に実施され、結果として効果をあげている組織に与えら

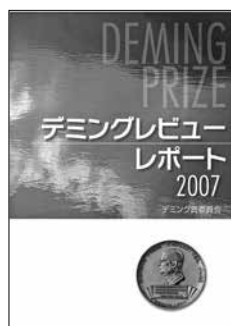
れる賞である。すでにデミング賞を受賞した企業について調査を行い、受賞企業にとって、なぜTQMが経営に欠くべからざる要素になっているのか、その推進の過程において、デミング賞実施賞への挑戦がどのように有効であったのか、受賞後どのような取り組みを行って成果をあげているのかについて、該当企業とデミング賞実施賞委員がワーキンググループを結成し、調査・報告を行った。

2007年度は、(株)ジーシー、トヨタ自動車(株)における調査を実施した。

【デミング・イノベーション・プログラム 報告会】

2007年11月16日、クオリティフォーラム2007にて、TQMを導入していない企業の経営者の方々のために、TQMの必要性・有効性をわかりやすく解説し、またTQMに取り組んでいる企業の担当者に対しては、新たな経営環境に適したTQMの推進方法を解説し、デミング賞委員会から新しいTQMの情報発信や提案を行った。

(株)ジーシー、トヨタ自動車(株)の取り組みをまとめたレポート



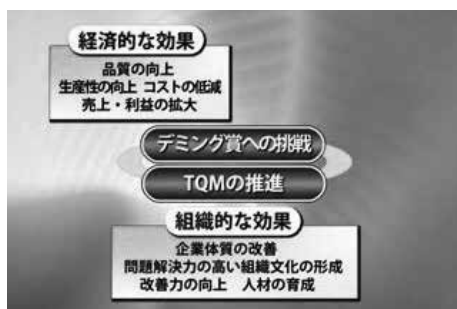
■デミング賞紹介DVDの製作

2009年4月、デミング賞の広報活動の一環として、DVD「デミング賞～エクセレントカンパニーをめざして」を製作した。



[内容]

デミング賞とは、デミング賞と品質管理の発展、デミング賞（実施賞）の審査基準、受賞組織経営者の声、デミング賞挑戦までのステップ、TQM診断



■デミング賞普及・推進功労賞（海外）創設

デミング賞の個人賞として「デミング賞本賞」があるが、これに加えて、2009年度から、「デミング賞普及・推進功労賞（海外）」を新設した。対象は、「総合的品質管理（TQM）の普及・推進に関し、優れた業績のあった者、主たる活動が海外に限定される者」。

現在は、デミング賞委員会委員から推薦のあった者を候補者とし、原則として3～5年ごとに選考が行われ、受賞者には賞状とメダルが授与される。

[デミング賞普及・推進功労賞（海外）受賞者]

2009年 グレゴリー・H・ワトソン氏

（フィンランド）

2012年 ジャナック・メタ氏（インド）

2014年 カン・トラクルフーン氏（タイ）

■デミング賞事業所表彰を「実施賞」に

一本化、実施賞の応募資格を柔軟化

2010年度から下記の改訂を行った。

- ・デミング賞事業所表彰の廃止、デミング賞実施賞への一本化
- ・一本化された実施賞の応募資格を以下に変更

改訂前

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは自律的な経営を行っている企業または企業の事業部です。

業種、規模の大小、公・私、国内・海外は問いません。ここでいう自律的な経営とは、次の条件を満たすことをいいます。

- a) 独自で自主的な経営ができる程度に、人、物、資金の運用を自由に行う責任と権限をもっていること。
- b) 一貫した品質保証を行う責任と権限をもっていること。
- c) 利益責任および将来の経営の発展を図る責任と権限をもっていること。



改訂後

デミング賞実施賞（以下、実施賞という）に応募できるのは、次の条件を満たす企業、機関、事業部、事業所、本部などの組織（以下、組織という）です。

- a) 社会的・経済的に意味のある製品・サービスを提供している、またはその提供にかかわっている。
- b) a) の製品・サービスに関する一貫した品質保証を行うために必要な機能の全部、またはその重要な一部（企画、設計・開発、製造、物流、営業、サービスなど）を担っている。
- c) b) の機能を担うのに必要な人、物、資金などの運用を行う責任と権限をもっている。

業種、規模の大小、公・私、国内・海外、組織の一部・全体は問いません。例えば、以下のような組織が該当します。

- ・全社、事業部
- ・利益を目的にしない政府、自治体、公益事業体、またはその一部
- ・工場、研究所、技術本部、調達本部、営業本部など
- ・ある製品のバリューチェーン全体にかかわる一連の組織
- ・本社と海外法人
- ・ある製品群を協力して提供している企業グループ

なお、上記a)の「社会的・経済的に意味のある製品・サービス」とは、当該組織とは経営上独立した人・組織に対して提供される製品・サービスという意味です。

■賞の名称、委員会制度、委員・顧問制度を改訂

2012年度から、デミング賞の制度の改訂を下記の通り行った。

[デミング賞実施賞，日本品質管理賞の名称の変更]

デミング賞実施賞 → デミング賞

日本品質管理賞 → デミング賞大賞

*デミング賞本賞，デミング賞普及・推進功労賞（海外）は変更なし。

[デミング賞委員会組織と委員会名の変更]

(1)以下の通り名称を変更した。

デミング賞総合調整小委員会

デミング賞制度小委員会

デミング賞本賞小委員会

デミング賞実施賞小委員会

日経品質管理文献賞小委員会



デミング賞運営委員会

デミング賞本賞選考委員会

デミング賞審査委員会

日経品質管理文献賞選考委員会

*総合調整小委員会・制度小委員会はその任務を運営委員会に統合し，廃止。

(2)デミング賞委員会に新たに副委員長を新設した。

[デミング賞委員会 委員・顧問制度の見直し]

a. 参与の廃止

b. デミング賞本賞受賞者 学識委員で80歳以上の方 →顧問に移行

c. 海外受賞企業・組織の代表者を新たに顧問に委嘱

[現実実施賞小委員会（2012年度からはデミング賞審査委員会）の委員構成]

委員に企業出身者を加えて構成する。



2015年授賞式

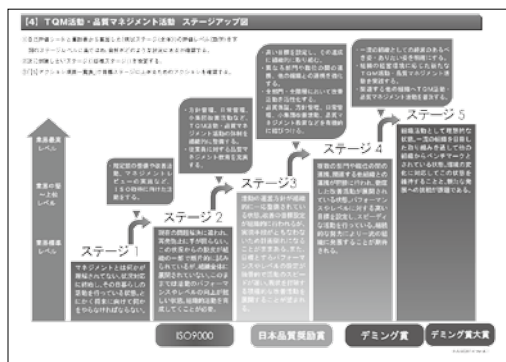
2 日本品質奨励賞

日本品質奨励賞（TQM奨励賞，品質技術革新賞）は，2000年に，わが国の産業の現状を踏まえ，この賞に挑戦することにより，その組織にふさわしいTQMの実践を通じて，厳しい国際競争に勝ち抜く優れた企業を輩出することを目的に創設した。

そして，2007年には，日本品質奨励賞 品質技術革新賞の間口を広げるため，「品質革新賞」に名称を変更した。

2015年度までの受賞組織数は，TQM奨励賞が39件，品質革新賞が22件である。

2014年に，日頃の自社のTQM活動・品質マネジメント活動の現状を客観的に把握し，そのレベルアップに向けて具体的に何をどうするのかを知り，更なる活性化をはかっていただくため，「TQM活動・品質マネジメント活動ステージアップ・ガイド」を作成した。このガイドは，ISO認証取得→日本品質奨励賞挑戦→デミング賞挑戦というTQM活動・品質マネジメント活動のレベルアップガイドであり，これから賞にチャレンジしていく企業に活用していただきたいツールである。



ステージアップ図



▶ ステージアップガイド
<https://www.juse.jp/qmsg/>

3 企業の品質経営度調査 優秀企業賞

2004年に開始した本調査は、2009年に第5回を迎えた。この第5回の調査を機に、さらに品質経営の普及、重要性を産業界に認識していただくことをねらいとして、本調査の解析結果に基づき、品質経営の推進において極めて優れた特長があると認められる総合ランキング企業上位5社を対象に表彰する「企業の品質経営度調査 優秀企業賞」を設けた。

第1回の表彰式は、2009年11月11日に経団連会館にて、「2009品質経営トップマネジメント大会」「日本品質奨励賞授賞式」「デミング賞授賞式」と併催で執り行われた。

表彰年	表彰企業（総合順位順）
2009年	パナソニック(株)、富士フイルムホールディングス(株)、シャープ(株)、トヨタ自動車(株)、アイシン精機(株)
2010年	富士フイルムホールディングス(株)、パナソニック(株)、(株)ジーシー、(株)東芝、大日本印刷(株)
2011年	(株)東芝、富士フイルムホールディングス(株)、大日本印刷(株)、パナソニック(株)、シャープ(株)
2014年	コニカミノルタ(株)、(株)ジーシー、富士通(株)、富士フイルムホールディングス(株)、シャープ(株)



2014年表彰式



表彰状とクリスタルの表彰楯

専用サイトのご案内

デミング賞、日本品質奨励賞、企業の品質経営度調査は、以下の専用Webサイトを設けている。各賞の詳細案内、受賞リストなども掲載している。



- ▶ デミング賞
<http://www.juse.or.jp/deming/>



- ▶ 日本品質奨励賞
<http://www.juse.or.jp/jqa/>



- ▶ 企業の品質経営度調査
<http://www.juse.or.jp/jqr/>

品質月間

■品質月間の目的と活動

わが国において、全国規模での品質意識の向上と、品質管理活動の幅広い普及を目的として、毎年11月に開催している「品質月間」は、1960年（昭和35年）に第1回が実施されて以来、製品やサービスの品質向上に取り組み、2015年で第56回を迎えた。

顧客志向、品質、安全の優先、継続的改善などを中心とした品質経営はグローバル市場での競争力の基盤であると言える。わが国の産業界が、今後も世界に誇る高品質の製品とサービスを向上し続けるためにも、継続して品質管理力を高め、安全、安心、環境への対応を積極的に取り組んでいくことが求められている。

このような時代背景のもと、毎年、各関係団体にご協力いただき、様々な活動を全国的に展開している。

【主な活動内容】

- ・品質月間テーマの策定
- ・品質月間ポスターの作成
- ・特別講演会の開催（全国主要都市にて開催）
- ・品質月間テキストの発行
- ・品質標語、品質川柳の募集・選定
- ・Q旗、胸章（Qマーク入り）、垂幕、のぼりなどの販売 ほか

【主催】＊2015年

品質月間委員会／日本科学技術連盟／日本規格協会／日本商工会議所

【後援】＊2015年

NHK／日本品質管理学会／日本生産性本部／日本能率協会／日本消費者協会／QCサークル本部／日本経済団体連合会／品質工学会

■専用サイトの開設

品質月間の情報を掲載した専用サイトを2013年にリニューアルした。専用サイトからは品質

標語、品質川柳の応募が可能であり、関連商品の紹介や過去のテーマ、品質月間の内容も閲覧できる。

また、2010年からはイラスト入りの品質川柳入選作品のスクリーンセーバーの無料ダウンロードサービスも行っている。



第56回品質川柳優秀作品より



▶ 専用サイト <http://q-month.jp/>

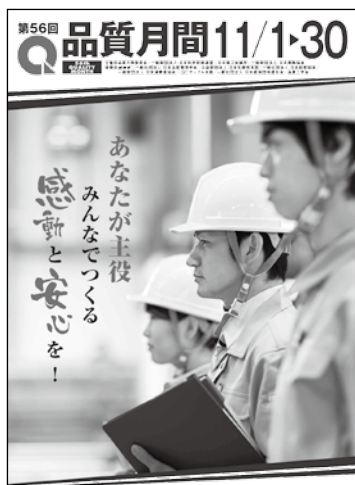
第56回品質月間テキスト（2015年）

No.	タイトル／著者（敬称略）
408	株式会社アドヴィックスの自立への道 川田武司（㈱アドヴィックス）
409	石川馨 品質管理とは 久米 均編（東京大学名誉教授）
410	ビッグデータ時代に求められる統計的思考力 山口和範（立教大学）
411	グローバル人材教育の実態と課題 立林和夫（元 富士ゼロックス㈱、JSQC グローバル品質管理教育研究会）
412	QCサークル活動10の力 QCサークル近畿支部、「QCサークル活動10の力」WG、監修 岩崎日出男
413	顧客接点から学ぶ 江渡康裕、掛足耕太郎 （日本能率協会コンサルティング㈱）
414	HACCPシステム構築ポケットガイド 監修 森田那雄／岩沼幸一郎、土肥 暁、岩本嘉之 （NPO法人食品保健科学情報交流協議会）

品質月間テーマ（2006年～2015年）

回／年	経営者・管理者向け	第一線職場向け
第47回／2006年	質経営 持続的成長への道	良い品質で守る生活 豊かな社会
第48回／2007年	品質経営で築く信頼感	標準守って足元固め
第49回／2008年	現場力 足元固めて 品質経営	知恵と工夫で 夢をカタチに
第50回／2009年	持続可能な社会をつくる品質 ～今、あなたにとって品質は？～	
第51回／2010年	品質の原点にかえり 先駆者の知恵に学ぶ	
第52回／2011年	危機を力に 品質革新 再び世界No.1	
第53回／2012年	品質力再興 やっぱ日本品質！	
第54回／2013年	価値ある品質で 新たな成長を！	
第55回／2014年	価値ある品質 技と想いをつないで	
第56回／2015年	あなたが主役 みんなでつくる 感動と安心を！	

*第50回からテーマは1つとなった。



第56回品質月間ポスター（2015年）

豆知識

その1：QマークとQ旗

「品質月間」を盛り上げるために、東京芸術大学に依頼し、QC共通のマークと旗を作った。当初のQ旗のQマークはブルーの国連色であったが、多くの方の意見を参考にして日の丸の赤色に決定したのが現在のQマークとQ旗である。

なお、Qマークは日科技連が商標登録をしている（商願2002-000472）。



その2：そのほか品質関連の日

10月	標準化月間
11月9日	いいQの日
11月第2週目	クオリティ・ウィーク

国際協力

1 世界品質同盟による Global Summit開催

2005年9月にアメリカ品質協会（ASQ）、ヨーロッパ品質機構（EOQ）、国際品質アカデミー（IAQ）と日科技連の4団体により創設された世界品質同盟（WAQ）の主催で、2006年5月にベルギー・アントワープで、第1回 World Summit of National Quality Association（現Global Summit）が開催された。

Global Summitは、世界各国の品質推進団体が集うネットワーキングの場として、20カ国を超える国からの参加を集め、以後、原則3年ごとに議長国により開催される。

2014年10月に、日科技連が議長国となり第4回Global Summitが日本・東京で開催された。京王プラザホテル（東京都新宿区）での品質国際会議（ICQ'14）に併催する形で開催され、各国品質推進団体による成功事例や協力事業などについて活発な議論や交流が行われた。

2 協力関係に関する覚書締結

■中国質量協会

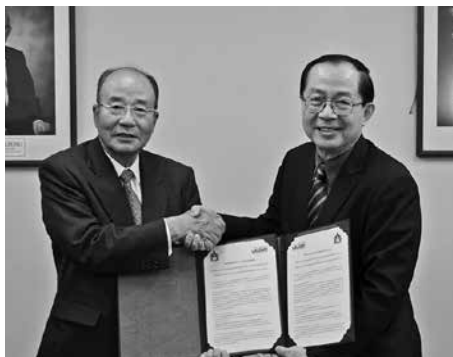
2009年6月に中国質量協会（CAQ）が創立30周年を迎えるにあたって、Chen Bang Zhu 会長が日科技連を訪問し、創立以来30年にわたる協力関係を記念し、また今後の更なる協力のための覚書が交わされた。

同年から、これまでの中国からの訪日研修団受入れの協力に加えて、日本から講師を派遣し、中国で企業向け品質管理・信頼性技法教育を開始した。また、中国質量協会が組織する訪日研修団に参加のサークルメンバーによる日本国内のQCサークル全国大会での事例発表が行われるようになった。

■泰日経済技術振興協会

2011年10月に長年協力関係にある泰日経済技術振興協会（TPA）のPrayoon Shiwattana 会長、Sucharit Koontanakulyong 事務局長が日科技連を訪問し、今後の更なる協力のための覚書が交わされた。

その始まりとして、日本から講師を派遣し、タイ・バンコクにて2012年5月に「方針管理における戦略立案セミナー」、2013年2月に「R-Mapセミナー」を共催した。



TPAとの締結式

3 日科技連理事長がMIQの理事に就任

TQMが躍動するインドにおいて、2007年インド・ムンバイ郊外に、同年、日本品質管理賞（現デミング賞大賞）を受賞したMahindra & Mahindra 農業機械事業部が中心となり、TQMの教育機関であるMahindra Institute of Quality（MIQ）が設立された。

設立から東京大学名誉教授の久米 均氏、慶應義塾大学名誉教授の鷲尾泰俊氏をはじめ、日本から多くの専門家がTQMに関する講義を行っている。また、日科技連の理事長が理事として就任し、受け継がれることとなった。2008年の第1回理事会はチェンナイで行われ、日科技連の浜中順一理事長が出席した。

4 海外企業向け訪日セミナー

海外での品質管理の普及に伴い、公募型の定例国際TQMセミナーに加えて、海外企業からの要請に対応したオーダーメイド型の訪日企業セミナーを2006年から開講した。

主な企業の初回セミナー開講年と参加人数は以下の通り。

[海外企業セミナー]

2006年

サイアムセメントグループ（タイ）50名

2007年

オートリブ（フランス）10名、ドバイアルミニウム（UAE）9名、ユニマイクロンテクノロジー（台湾）24名

2008年

海洋王照明科技公司（中国）23名

5 ベストプラクティスセミナー

2012年11月に同年デミング賞、ならびにデミング賞大賞を受賞したインド企業5社のトップマネジメントを講演者として招き、インド・ニューデリーにあるロイヤルプラザホテルにてTQM Internationalと共催でデミング賞受賞企業によるベストプラクティスセミナーを開催した。

SRF化学製品事業部、Mahindra & Mahindra 農業機械事業部スワラジ部門、Lucas TVS, Rane (Madras), TATAスチール社など、インドを代表するグループ企業が受賞企業として揃ったことから、注目を集め、会場のホールが満員となる120名の参加者を集めた。

6 海外企業向けTQM診断

2011年度からデミング賞の制度が一部変更となり、「デミング賞委員によるTQM診断」が原則1度しか受診することができなくなったため、日科技連による海外企業向けTQM診断を開設した。これまでに3ヵ国8社から申し込

みがあり、担当診断委員が更なるTQM活動推進やデミング賞への挑戦などに関するアドバイスをを行った。

7 海外での招待講演

海外でのQCサークル活動やデミング賞の広まりに伴い、賞や教育・訓練の普及・推進への関心が高まり、各国の会議で日科技連の役割や活動について紹介する機会が増えている。

ここ10年間に招待講演を行った会議は以下の通り。

[会議名]

2009年

国際QCサークル大会（フィリピン・セブ）

2010年

国際チーム小集団優秀事例発表大会（シンガポール）、国際QCサークル大会（インド・ハイデラバード）

2012年

国際QCサークル大会（マレーシア・クアラルンプール）

2013年

ザンビア全国改善大会（ザンビア・ルサカ）、国際QCサークル大会（台湾・台北）、国際品質生産性大会（インドネシア・メダン）

2014年

国際品質大会（インドネシア・ソロ）

2015年

国際科学実践会議（ロシア・サンクトペテルブルグ）



2010年国際QCサークル大会（インド）

広報・出版活動

1 Webジャーナル『クオリティマネジメント』

■月刊誌からWebジャーナルへ

1950年3月に創刊された月刊『品質管理』誌は、産業界で長く、広く愛読され、日本の品質管理の普及・発展に大きな役割を果たしてきた。その時々の読者の期待に応えるべく誌面を常に刷新し、2002年1月には『クオリティマネジメント』と誌名を変え、2011年7月号では創刊800号を記念するに至った。

しかしながら、産業界を取り巻く環境の変化は著しく、読者の求める記事・情報をタイムリーに提供していくことが求められるようになり、これに対応するべく、月刊誌としての発行は2011年12月号（vol.62 No.12）をもって終了し、2012年4月から、ITを活用した新しいメディアとして、Webジャーナル『クオリティマネジメント』がスタートした。

■Webジャーナルの特徴

「日本で唯一の“品質”総合専門Webジャーナル」として、主な読者層は企業のトップ層、ミドルマネージャーや管理職とし、様々な経営課題をクオリティの視点でとらえ、解決の道筋を示すことを目指している。

掲載内容は、スペシャルインタビュー、特集、連載、コラム・エッセイ、特別企画の5本を柱に、年4回発行し、各記事を順次更新していく。

Webジャーナル移行時から掲載しているコラム「温故知新」は、『品質管理』誌のバックナンバーからその当時の実状を知ることができる文献や、今も語り継ぎたい記事や真理を石川馨先生からのメッセージとして紹介しており、好評を得ている。

日科技連賛助会員会社は、会員特典として、1口につき1ユーザー無料で閲覧できる。

[企画内容]

・スペシャルインタビュー

・特集

「日本のものづくり～品質で日本を盛り返す」

「防災・減災～次の世代につなげるために」

「チームの底力」

・連載

「日本品質奨励賞への道」

「TQMとISO 9001改訂のマネジメント

システム要素間の関係」

「『現場力』の変化を見る」

・特別企画

「品質管理シンポジウムルポ」

「品質管理検定実施概要報告」

・コラム、エッセイ

「温故知新－石川馨先生からの時を超えた

メッセージ」

「QMコラム」

「企業と人間力」



▶ Web『クオリティマネジメント』
<http://qm-juse.jp/>

2 月刊誌『QCサークル』

■創刊50周年

『QCサークル』誌は、2012年4月号をもって創刊50周年を迎えた。本誌の前身である『現場とQC』誌の1962年4月の創刊号で当時の編集委員長であった石川 馨先生の呼びかけで始まったQCサークルも、同じく50周年を迎えたことになる。

そこで、創刊50周年を記念し、「50周年記念特大号—新たな価値を求めて—」と題し、創刊からこれまでのQCサークルのあゆみを振り返るとともに、副題にもあるように、これからのQCサークル活動（小集団改善活動）に求められる新しい価値を探る意味で、事務・販売・サービス部門での広がり、特に医療・福祉や全国の自治体組織や、中堅企業への普及など、今後発展すると思われる分野の動きを特集として掲載した。

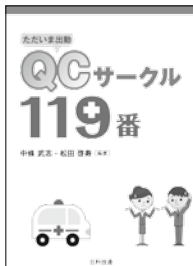


■ただいま出動 QCサークル119番

QCサークル活動（小集団改善活動）は、様々な業種・職種において普及・拡大が進んでいる。今では企業規模や製造業に限らず、事務・販売・サービス部門、特に医療・福祉や全国の自治体組織、中堅企業でも活発な活動が見られるようになった。

そこで、活動を始めたばかりのサークルや導入直後の職場が活動を進めていく中で様々な問題や悩みにぶつかった時の参考となる記事として、2010年からノウハウとポイントを4コママンガに収めた「ただいま出動 QCサークル119番」の掲載を開始した。

すでに70事例を越え、2015年3月に日科技連出版社から同名の単行本を発行し、多くの読者に活動のヒントを提供している。



■QCサークル石川 馨賞

1962年に創刊された『現場とQC』誌（『QCサークル』誌の前身）の副題Quality Control for the Foremanの略称をとって、1965年に「FQC賞」が創設され、その後、1990年に石川 馨先生の偉大な業績をたたえ、「FQC賞」を「QCサークル石川 馨賞」と改称し、今日に至る。FQC賞の受賞は258件であった。

2013年、QCサークル活動（小集団改善活動）の更なる普及・発展と活性化をはかるため、特色ある活動によって本活動の普及・発展と活性化に貢献したサークルに贈られる賞として「QCサークル石川 馨賞奨励賞」を新しく創設した。

2015年度までの受賞件数は、QCサークル石川 馨賞は697件、奨励賞は88件である。

なお、全国のQCサークル活動（小集団改善活動）推進の一助として、QCサークル本部長としてご尽力いただいた米山高範氏（コニカミノルタ株）から日科技連に多大な寄付があり、この寄付を2005年度から「QCサークル石川 馨賞」表彰のための基金として充当している。

授賞式は年2回、QCサークル全国大会（小集団改善活動）にて行っている。



表彰楯



▶『QCサークル』誌Webサイト

最新号情報、創刊から50周年の歴史などを掲載
http://www.juse.or.jp/qc_circle/

3 日科技連賛助会員制度

日科技連は、科学技術ならびに経営管理技術の振興に必要な諸事業を総合的に推進し、人材の育成をはかり、産業と学術・文化の発展に寄与することを目的としている。品質重視の考え方にもとづき、産業界の品質経営実現に向け様々な事業を展開している。こうした当財団の事業目的にご理解とご賛同いただける企業・組織に賛助会員として入会いただき、当財団が取り組む品質経営の推進・普及に支援いただくための制度である。

入会金（1万円）、年会費（1口5万円）で様々な会員特典が利用できる。

Web版に移行した『クオリティマネジメント』の閲覧も、2012年の公開時から特典に加えられた（1口につき1ユーザー）。

2015年12月現在の賛助会員数は、677社／686口である。

会員特典

日科技連賛助会員にご入会いただく、下記の特典が受けられます。会員特典をご活用いただき、充実した業務計画にお役立てください。

日科技連主催のセミナー等事業に会員料金でご参加いただけます

会員料金は一般料金よりも15%割優待となります。
※企業名と所属が明記された会員料金でご参加いただけます。

品質経営トップマネジメント大会へご招待します

専門家や企業のトップによる講演会です。

「品質」総合専門Webジャーナル『クオリティマネジメント』を無料でご覧いただけます

<http://qm-juse.jp/>
※会員登録料1ユーザー400円（税別）

セミナーを年間予約することで計画的に業務を推進できます

毎年12月～翌年2月に年間予約を行っています。

機関紙『日科技連ニュース』(年10回発行)を会員のみなさまにお送りします

各社の品質管理の取り組みや専門家によるシリーズ記事、事例案内などを掲載しています。

貴府担当部署へは各種事業案内を定期的に送ります
E-mailにて「賛助会員通信」も配信します

4 機関紙『日科技連ニュース』

日科技連の創立以来、賛助会員向けに日科技連の活動や品質管理に関する最新情報を伝えるために機関紙を発行している。

現在の『日科技連ニュース』は、前身となった『ENGINEERS』（最終発行2001年12月号・通巻638号）を大幅に改訂し、2002年1月号から機関紙タイトルを『日科技連ニュース』と

改め、年10回（1月・2月／7月・8月は合併号、他の月は毎月発行）発行している。2015年12月号で通巻140号となる。

読者から好評な専門家によるシリーズ記事は、年5本前後掲載している。

[シリーズ記事掲載タイトル(2014～2015年)]

- ・品質保証体制を再構築する
- ・創造アーキテクトと新商品企画の定式化
- ・顧客満足から顧客感動へ
- ・ビジネスで使える確率・統計・戦略
- ・人為ミスゼロ化の考え方と手法
- ・ISO 9001, 14001規格改正動向
- ・環境経営入門
- ・小集団活動活性化のレシピ
- ・日本の産業力・国際競争力強化と品質



5 講演録『クオリティのひろば』

機関紙『日科技連ニュース』とともに2002年から発行を開始した講演録『クオリティのひろば』は、日科技連の各事業で行われた著名人や専門家による講演の講演録であり、賛助会員へ会員特典として配付した。

2010年4月（No.57）の発行が最終となった。



『クオリティのひろば』掲載テーマと講演者

(所属は発行時のもの)

No	発行 年月	テーマ	講演者
40	2005.12	「企業の社会的責任」を求めて	前田又兵衛氏（前田建設工業株）
41	2006.1	ユーザー企業から「診る」経営とITの品質 ～品質の作り込みの観点から～	木内里美氏（大成建設株）
42	2006.3	営業を軸にした企業革新 『顧客視点の組織営業モデル』	浅霧敦生氏（株ジェーエヌエル）
43	2006.5	株式会社サキコーポレーションにおける経営革命 ～女社長が率いる“天空”の工場～	秋山咲恵氏（株サキコーポレーション）
44	2006.7	企業経営と現場力 ～強い企業には強い現場がある～	遠藤 功氏 （早稲田大学大学院／株ローランド・ベルガー）
45	2006.9	人を育てる、人に育てられる ～柔道を通して学んだこれからの生き方～	山下泰裕氏（東海大学）
46	2006.11	デンソーの“モノづくり経営”の進化と深化	深谷紘一氏（株デンソー）
47	2007.1	企業競争力と品質管理の新たな展開 ～製品開発の現場の視点から～	三澤一文氏（アクセンチュア株）
48	2007.4	工作機械産業における技術経営 ～森精機が求める品質と経営～	森 雅彦氏（株森精機製作所）
49	2007.10	「際立つ高収益企業」を目指して	大久保尚武氏（積水化学工業株）
50	2008.3	品質プロセスを支える横断的管理技術	椿 広計氏（筑波大学大学院／統計数理研究所）
51	2008.3	新日鐵におけるグローバル経営	三村明夫氏（新日本製鐵株）
52	2008.9	新しい日本の経営とは何か ～日本企業の強みと弱みを考える～	菅野 寛氏 （ボストンコンサルティンググループ）
53	2009.3	日本企業の再活性化 ～事業再生の取り組みを踏まえて～	富山和彦氏（株経営共創基盤）
54	2009.3	東芝イノベーションによる経営戦略	西田厚聰氏（株東芝）
55		欠番	—
56	2010.3	マクドナルドの経営改革 ～価値を創造し、顧客の期待を超える～	原田泳幸氏 （日本マクドナルドホールディングス株）
57	2010.4	ボッシュの進めるグローバル品質向上活動	織田秀明氏（ボッシュ株）

6 日科技連紹介DVD

日科技連総合事業案内に加え、日科技連の活動をわかりやすく紹介する視覚的なツールとして、日科技連の活動紹介の映像化に取り組み、2009年に「品質管理の歴史を創る日本科学技術連盟 あゆみと活動」（映像時間23分）と題したDVDを制作した。

前半は日科技連の創立から現在に至るまでの歴史の流れ、後半は講義風景などを交えて活動内容をまとめている。日本の品質管理の歴史に

ついても学べる内容であり、日科技連 Web サイトにて公開し、広く活用いただいている。



▶ 紹介動画

<http://www.juse.or.jp/aboutus/introduction/>